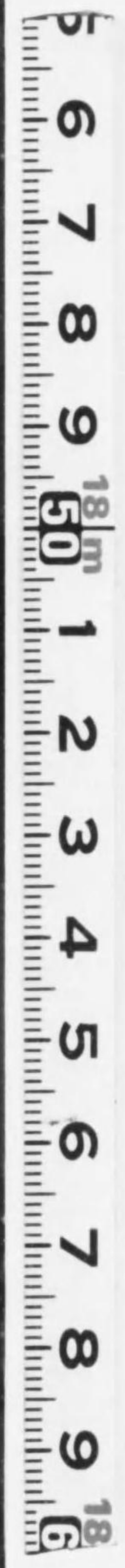


特252

623

大

京都名勝



始



30
15

特252
623



都

名

勝



はしがき

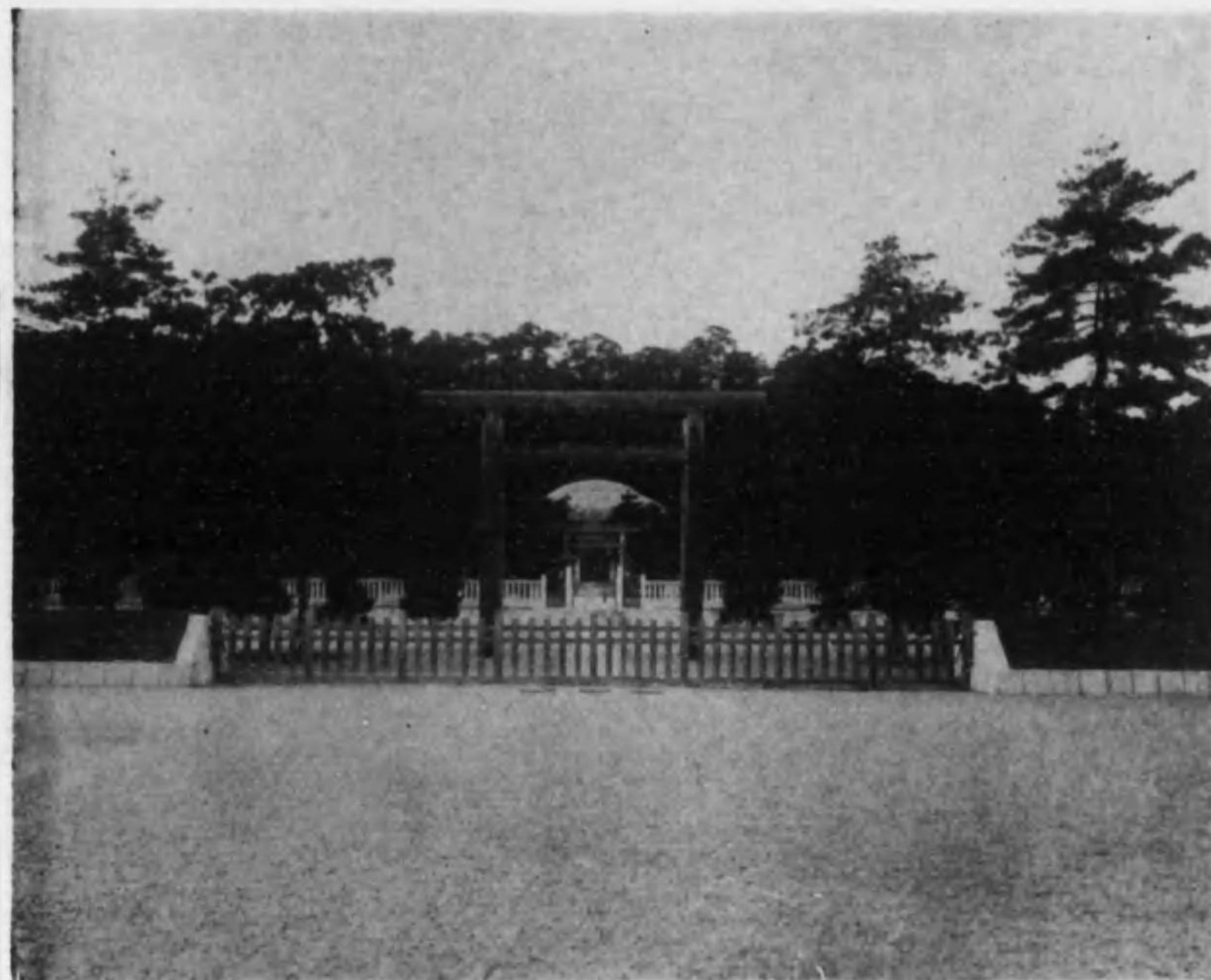
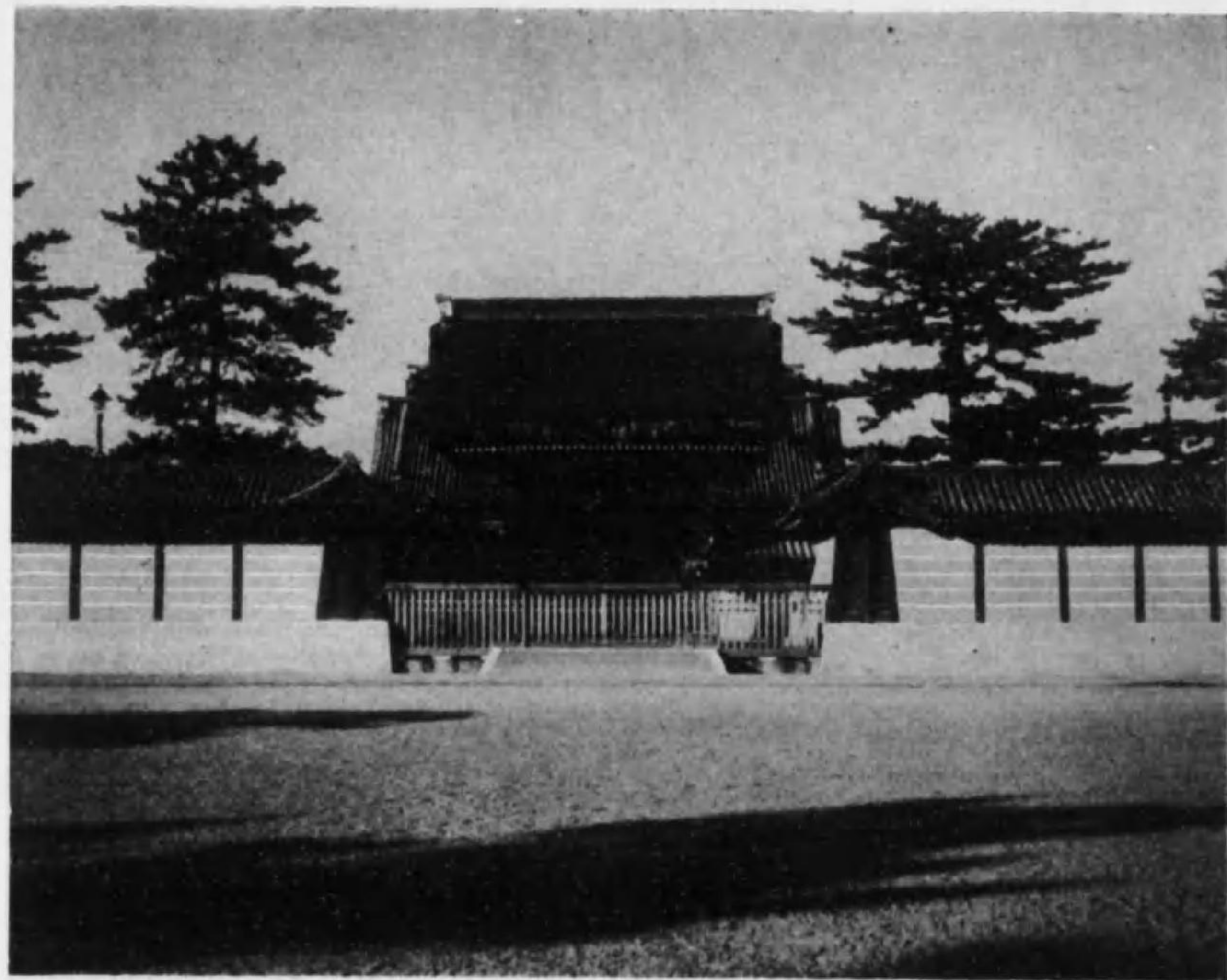
光輝ある歴史と、秀麗の風光とを持つ京都には、名勝と名付くべきものも亦頗る多く、限られた範圍に於て、その總てを紹介することは至難と言はねばならない。

従つて、茲に掲載のものも、比較的廣く知られてゐるものゝみを抽出したのであつて、これが京都名勝の總てでないことは言ふ迄もない。なほ、附録として京都の史蹟名勝天然紀念物の略説並に關係重要年表を加へた。彼此併せて廣く江湖の利用を得れば幸甚である。

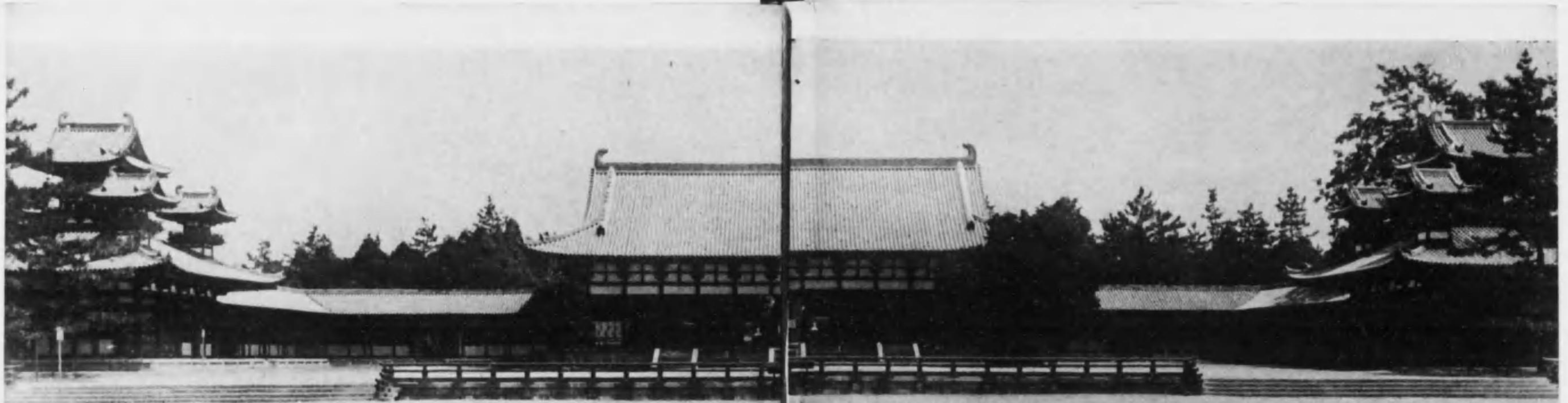
昭和十四年四月

京都市観光課





(照參頁六) 陵御山桃見伏 上
(照參頁五) 所御都京 上左
(照參頁四十三) 宮離條二 下左



(照參頁二十二) 宮 神 安 平 上

(照參頁九十二) 社 神 雷 別 茂 賀 右

(照 參 頁 七) 社 神 苜 稻 左





(照參頁八十四) 山 嵐

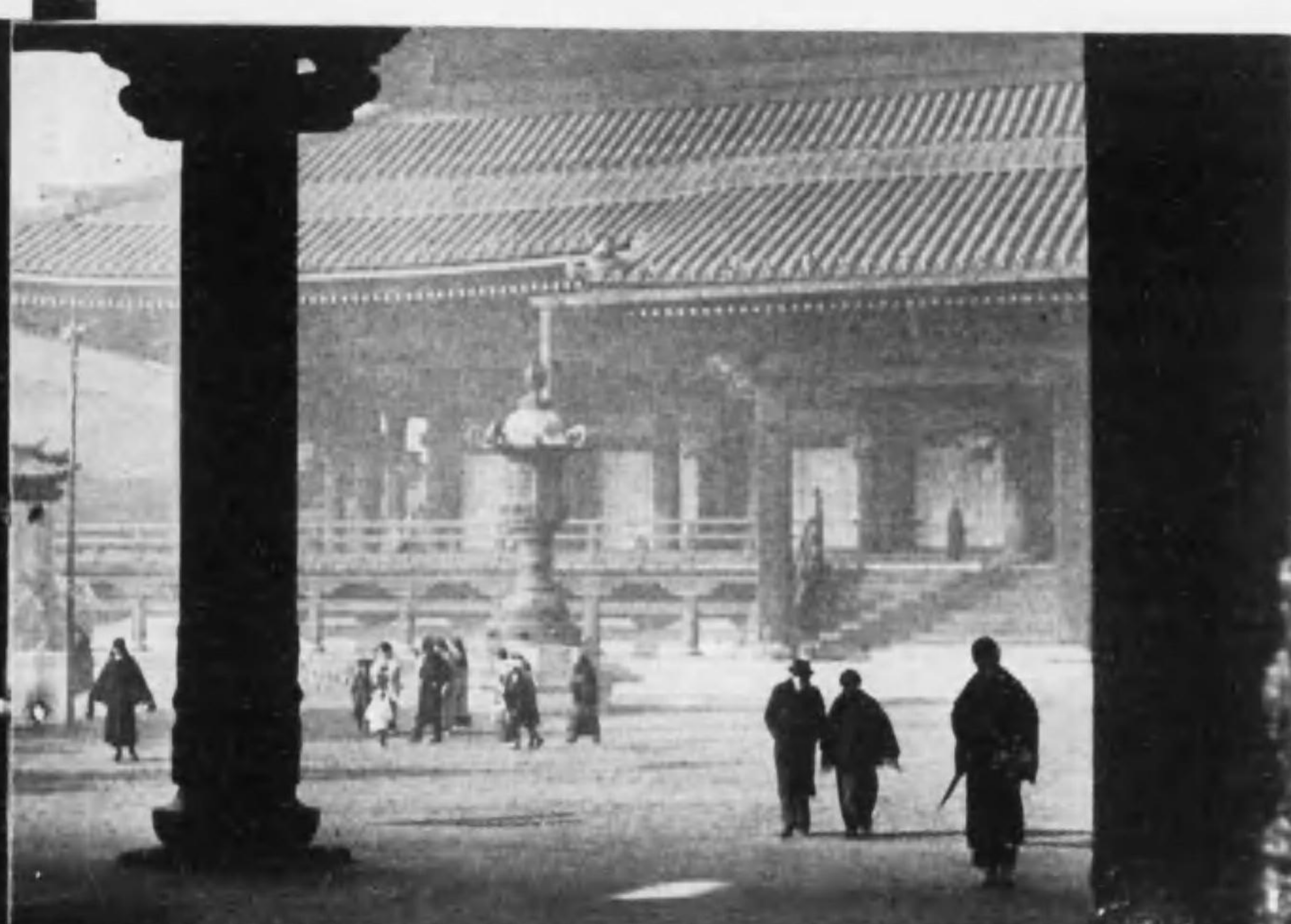


(照參頁四十) 櫻 夜 園 紙



高 雄 保 津 川 下 里
(照参頁八十四) (照参頁七十四)

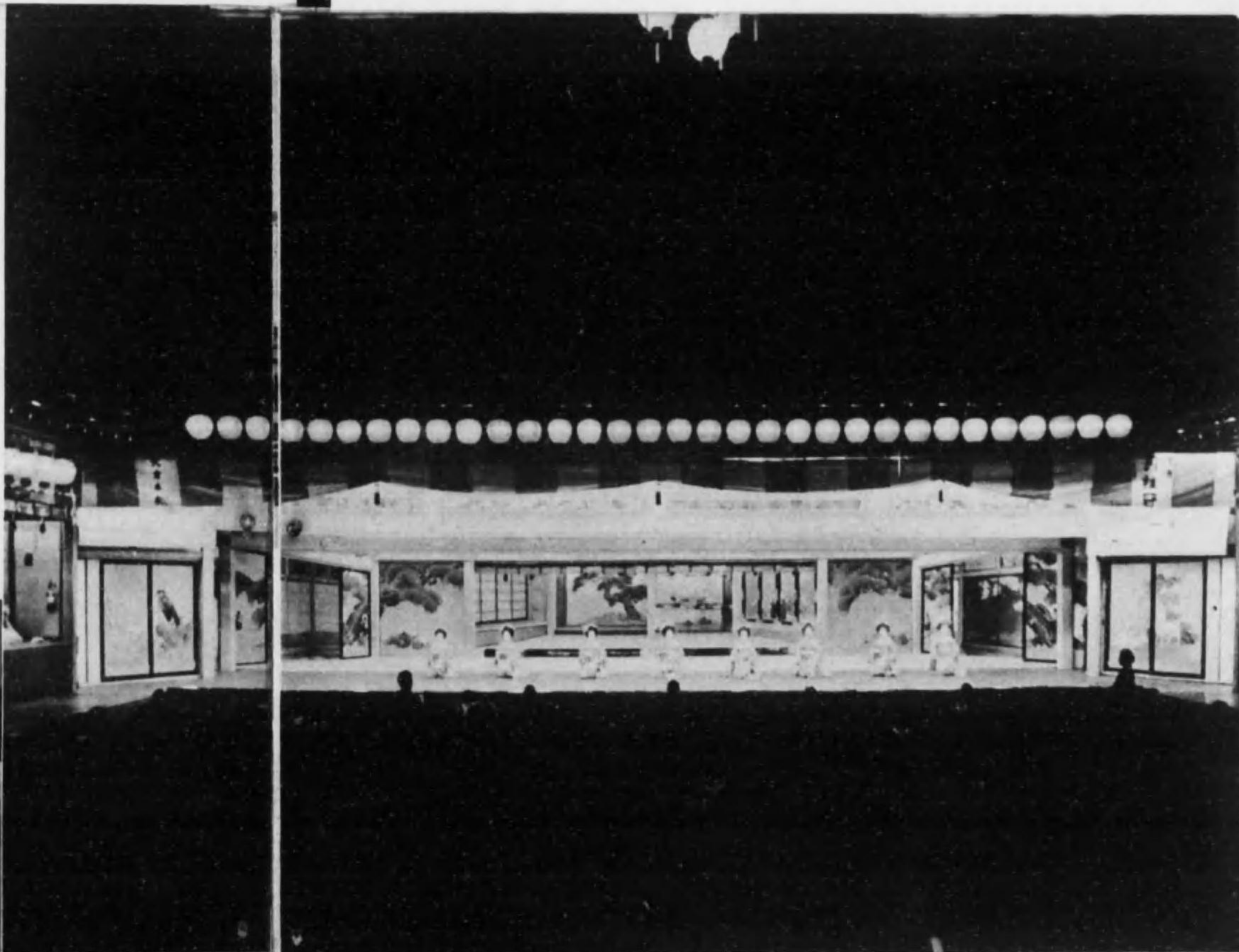




(照參頁七十三) 寺 願 本 東 ①
 (照參頁一十) 寺 水 清 ②
 (照參頁一十三) 寺 閣 金 ③
 (照參頁五十五) (堂鳳凰) 院 等 平 ④



(照參頁十四) 鴨 川 踊



(照參頁九十三) 都 踊





祇 代 團 祭
(照參頁六十)
(照參頁三十二)



染 織 祭
(照參頁九十二)
(照參頁一十二)



京 都 名 勝

附 録

京都の史蹟名勝天然紀念物
京都關係重要年表



(通條四) 部一の街市

京都名勝目次

番號	名	所	頁
1	京都御所	護王神社・梨木神社	一
2	伏見桃山御陵		五
3	乃木神社	静魂神社	六
4	稻荷神社		七
5	東福寺	泉涌寺	七
6	三十三間堂	養源院・妙法院・豊臣秀吉墓	八
7	恩賜京都博物館		八
8	豊國神社	大佛(方廣寺)	一〇
9	西大谷		一〇
10	清水寺	地主神社・八坂の塔・護國神社・高臺寺	一一
11	圓山公園		一一
12	八坂神社	祇園祭	一二
13	知恩院		一三
14	インクライン・上水道		一四
15	南禪寺		一五
16	岡崎公園	美術館・勸業館・動物園	一六
17	染織祭		一七
18	平安神宮		一八
19	時代祭		一九
20	黒谷	永觀堂・眞如堂	二〇
	銀閣・大文字山		二一
	下鴨神社・上賀茂神社		二二

32	御室・妙心寺・廣隆寺	四四
31	鞍馬寺	四三
30	八瀬・大原	四二
29	比叡山・延暦寺	四〇
28	新京極・賀茂川	三八
27	東本願寺	三七
26	東寺	三六
25	西本願寺	三五
24	二條離宮	三四
23	北野神社	三二
22	金閣寺	三一
21	大德寺・船岡山	三〇
	葵祭	二九
	建勳神社	
	平野神社	
	涉成園	
	都踊・鴨川踊	
	三千院・寂光院	
	由岐神社	

33	高雄	四七
34	嵐山・大堰川	四八
35	水尾	五〇
36	松尾神社・西芳寺	五一
37	山科	五一
38	醍醐寺	五三
39	宇治・萬福寺・平等院	五四
40	石清水八幡宮	五六
	横尾西明寺・梅尾高山寺	
	天龍寺・大覺寺・車折神社・舟遊祭・愛宕山	
	清和天皇水尾陵・圓覺寺・清和神社	
	岩屋寺・大石神社・毘沙門堂・牛尾山法嚴寺	
	宇治川・宇治神社・縣神社	

附 録

京都の史蹟名勝天然紀念物

京都關係重要年表

自一四五一年至二五〇年

自七二七年至七七三

京都市の沿革

我が京都市の基は今から約一千百餘年前の平安京に在る。第五十代 桓武天皇は、延暦の初長岡京の造營にとりかゝらせられたが、その工事は意の如く捗らず、その上造宮の有司の間に事故などもあつたので、和氣清麻呂の議を容れ、同十一年頃から葛野郡宇太村の地を新都と定め、著々その工事を進め、同十三年十月二十二日を以て、平城京からこの平安京に遷らせられた。今官幣大社平安神宮の時代祭を十月二十二日と定めてゐるのは、このめでたい日を取つたものである。

この平安京の都制は唐の長安京のそれに倣つたもので、南北一千七百五十三丈・東西一千五百八丈の長方形の都城であり、條坊街區悉く井然たる棋盤目をしてゐたから、今の京都市もその面影を存して、中央部は規則正しい方形の町割である。平安京の東北隅は今の上京區寺町通石薬師下る京極小學校の南約七十米の地點に當り、東南隅は今の東九條大石橋の東方の鴨川河道に當り、西南隅は今の右京區西京極西の庄の西部、桂橋東詰の南々東約五百七十米の地點に當り、西北隅は今の右京區花園妙心寺裏門の北西々約二百米の地點に當る。東西の中間に南北に通ずる幅二十八丈の道路を朱雀大路といひ、その南端に羅城門があり、北端は二條大路に終り、そこに朱雀門があつた。この大路によつて平安京が自ら東西に分たれ、東部を東の京または左京または洛陽といひ、西部を西の京または右京または長安といつた。當時の大内裏即ち宮城は、一條と二條との間、東西兩大宮大路の間に在つて、朱雀門はその南正門であり、その北に應天門があり、その内に大極殿があつた。

内裏即ち皇居は大極殿の東北方に當り、やはり南北に長い長方形の地域であつた。平安京の造營は桓武天皇の御代を過ぐるまでも繼續されたが、民戸はとかく東の京に多く、西の京にはいつまでも農家が散在してゐただけで、少しも榮えなかつた。これは地勢といひ、土質といひ、井泉の水質といひ、すべて西の京が住民を引付けるに適しなかつたためであらう。かく左京の榮えた結果は東京極即ち今の寺町通を越えて、鴨川縁にまで町家の發展を見、更に鴨川を越えて白河の地域に貴族權門の別業或は寺院の營まれるなど、鴨東の地は既に夙く平安初期からも相當に都人士の着眼する所となつた。されば平安末期には京白河と並べ稱せられ、北は鹿ヶ谷附近から、南は今の東福寺邊までをも包含する白河は、正に洛中と異なる所なきまでの發展を遂げたので、今の岡崎公園界隈には白河天皇を始めその御一族の建立された六勝寺（法勝寺・尊勝寺・最勝寺・圓勝寺・成勝寺・延勝寺）の堂塔伽藍が聳え立ち、祇園感神院の南にかけては、平家の六波羅第宅・三十三間堂・清水寺・泉涌寺などの薨が、夕陽に輝いたことであつた。

鎌倉時代になると、歴代の皇居は多く里内裏に置かれ、平安京の内裏は廢滅に歸した形となり、今の京都御所の基をなした東洞院土御門殿が皇居として漸く重きをなすに至り、左京は依然としてその繁榮を維持し、白河には六波羅探題の府・建仁寺・南禪寺・東福寺など興り、熊野神社は三所に勧請せられ、知恩院・金戒光明寺なども創建せられて、更に繁榮の度を加へたのであつた。

室町時代の初に足利氏の幕府が室町に營まれて、いはゆる花の御所を出現し、やがて北山には金閣が建てられ、三管領四職の第宅が幕府の周圍に軒を並べたので、上京は概ね武家屋敷を以て占め

られ、下京は寺院と町家で充たされたが、應仁の大亂は十一年の長きに亘つて、この花の都を焦土と化し、やがて夕雲雀の立ちのぼる荒野となつたので、公卿を始め武家町人も悉く地方に落ち下り、京都は空前絶後の寂れを示し、恐らく人口の最も減じた時であつたらう。永祿から天正にかけて、織田信長・豊臣秀吉といふ尊皇の兩雄が起り、皇居の修理築營都市の整理に甚大の力を致したので、我が京都の景觀も漸く舊に復し、江戸時代になると、所司代屋敷町奉行所が設けられた上に、二條城は築かれ、本願寺は東西の兩本山に分れて、更に京都の繁榮を加へ、西陣織・清水焼・粟田焼などの産業が勃興して、經濟文化の花は絢爛を競うたのであつた。

慶應三年十月徳川慶喜が大政を奉還して、王政がめでたく復古し、明治維新の大業がその緒に就くと、我が京都は天下の政治の中心となり、學問・藝術・宗教の中心たる由緒と併せて、頓に時めき始めたが明治二年に東京奠都の事あつて、車駕東幸あらせられると、諸官衙・公署・公卿指紳の第宅もこれに伴うて漸く東京に移されたので、一時に火の消えたる如き寂寞を感じた。京都府知事横村正直、同北垣國道これが挽回策として、相ついで琵琶湖疏水の大計畫を樹立したが、未だその工事に着手しない以前、明治二十一年二月に市町村制が公布されると、直に市制實施の準備に取りかかり、従來の鴨川以西の市部に愛宕郡岡崎村・聖護院村・吉田村・淨土寺村・南禪寺・鹿ヶ谷・粟田口・今熊野・清閑寺を編入して、新に町名を附し、翌二十二年四月から京都市と稱した。同二十八年には官幣大社平安神宮を創建して、桓武天皇を祀り奉り、平安奠都一千百年記念の盛大な式典を擧げ、内國勸業大博覽會をも開催した。この頃かの琵琶湖疏水の大工事も既に竣成し、京都市

運は益發展の一路をたどり、人口も漸く増加し、殊に明治三十五年二月第二回市部擴張を斷行して、葛野郡大内村大字東鹽小路及び西九條を編入すると、こゝに上水道設備の必要を痛感したので、直に第二疏水工事に着手し、同四十五年三月に至り遂にその完成を見、灌漑運輸は固より發電上水に至るまで、多大の便益を享けることゝなつた。かくて大正七年四月第三回の市部擴張を行ひ、愛宕郡田中村・下鴨村・野口村・鞍馬口村・白川村の全部と上賀茂村及び大宮村の一部、葛野郡朱雀野村・大内村・七條村の全部と西院村の一部、紀伊郡柳原町・東九條村の全部と上鳥羽・深草兩村の一部を編入し、こゝに一大膨脹を見たのである。而も更に大京都市出現の機運漸く熟し、昭和六年四月には第四回擴張が行はれ、伏見市を始め周圍二十八ヶ町村を市部に編入し、その面積に於て世界有數の大都市となり、人口は百十三萬を數へ、東は大阪市石山町に接し、南は巨椋池を含み淀川に及び、西は愛宕山を越えて丹波に接し、北は上賀茂・大宮兩村全部を擁するに至つた。されば初め上京下京の二區のみであつたものが、今や上京・中京・下京・左京・東山・伏見・右京の七區となり、市内には官立大學公立大學各一、私立大學四、官立高等學校一、官立專門學校二、公立專門學校二、公私立中等學校四十餘校、小學校百四十の多きに上り、教育の一方面より見るも、その進展の顯著なるに驚歎を禁じ得ないものがある。

乃木神社

拜料五錢

乃木神社

規模は明治天皇の御陵の三分の二程であるが、形は全く同じで、唯御堀がないだけが異ふ。

静魂神社

三、稻荷神社

桃山御陵の南下の方にある神社で、門は西向、本殿は北向になつてゐる。陸軍大將乃木希典をまつる。もと神戸の人村野山人が獨りで造營したもので大正五年に出来あがつた。門は臺灣阿里山の檜を用ゐ、その扉の板の大きいことは驚くべきものである。東北隅に記念寶物の陳列された庫があり、その南には將軍が明治三十七八年日露戦役に第三軍司令官として旅順口の攻撃にあたり、司令部に充てゝ起居した支那風の民屋が作られてある。本殿の西に夫人乃木静子をまつつた静魂神社がある。大正七年に出来たものである。

稻荷神社

交通
1市電又は市バス
2京阪電車船場下車
3省線船場下車

伏見街道に沿ひ、奈良線稻荷驛・京阪線稻荷停留場の東方にある官幣大社で、倉稻魂神・佐田彦神・大宮能賣神などをまつる。もと背後の山の頂上にあつたが弘法大師が朝廷の許を得て今の所に移築したといふ。五穀豊熟・商賈繁昌を守る神として、世の信仰を受けること關東の成田不動・四國の金刀比羅宮と三幅對になつてゐる。本殿は天正年中に造られたもので、今國寶になつてゐる。官祭は四月九日であるが、私祭は四月の二の午の日に御幸式、五月一の卯の日に還幸式を行ふので、俗に「うま／＼とお出かけ、うか／＼とお歸り」といつてゐる。別に二月の初午祭もあるが、何れも賑かなもので名ある祭の一である。

四、東福寺

東福寺

交通
1市電東福寺下車
2市バス三ノ橋下車
3京阪電車東福寺下車
午前八時—午後四時

伏見街道一の橋の南の東側、京阪電車東福寺停留場の東方、市電東福寺終點の南に在る臨濟禪宗の本山で、今から六百八十年程前に藤原道家の建立にかゝり、聖一國師が開山となつてゐる。室町時代に再建された三門を始め月下門・浴室などが國寶として遺つてゐる。有名な明兆といふ畫家がこの寺に住み、立派な畫を多く描いて遺したから、毎年三月十五日にはその筆に成る大涅槃圖（縦三丈九尺・横二丈六尺の大幅で、釋迦往生の様がかいてある）を掲げて一般の參拜を許す。境内は東山の麓で靜かな風景のよい所であるが、特に遍天橋から見た紅葉は京名所の隨一として世に聞えてゐる。また本堂（佛殿）の東方に藤原兼實（九條家の人で、よく源頼朝と親んだ）の廟や道家・明兆などの墓もある。

泉涌寺

交通
市電泉涌寺道下車

五、三十三間堂

三十三間堂

交通
市電又は市バス七條大和路下車
拜料大人二十錢 小人十錢
以上一人に付十錢
以上一人に付五錢
以上一人に付三錢
拜料時間
午前七時—午後四時
拜料所要時間
約二十分

東福寺の北方五町ばかり、東大路七條の西南にある天台宗の寺で、妙法院の管理に屬してゐる。もと後白河法皇がその御所を捨て、寺となされたもので、中には一千一體の觀世菩薩像を安置してある。堂の内の柱間が三十三間であるところから、俗に三十三間堂といふ。

養源院

又一體の観音は卅三種の観音に化身し得るからそれが一千一體では即ち「京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三十三體ござる」こととなる。本堂の裏縁で昔行はれた通矢は、武士の弓術にすぐれたことを證明するもので、紀伊藩の和佐大八といふ武士は、一晝夜に通矢八千百三十三本（總矢数は一萬三千五十三本で、その中の合格数である）を射たといふのであるから驚かされる。本堂の大棟は柳の材であるといひ、「三十三間堂棟由来」といふ淨瑠璃さへもある。

東向養源院は天台宗延暦寺の末寺で、豊臣秀吉の側室淀君が、その父淺井長政の追善のために建てたものである。方丈の縁側の天井には伏見城で鳥居元忠等一味の忠死した板間を張つたといふので、世に「桃山の血天井」として名高く、松の間には俵屋宗達（たわやむねたか）の書いた國寶の襖繪がある。

妙法院は東大路七條の東北にある天台宗の門跡寺で、今から七十年ばかり前の文久三年八月に攘夷論の七卿が朝廷の御覺えを失ひ、この寺に集まつて身の振方を議し、長州藩の武士に衛られて都落に決したことは有名な話である。今豊臣秀吉や桃山時代に關係の深い寶物が多くこの寺に保存してある。

豊臣秀吉墓 妙法院の南の坂路を東方に行けば豊國廟の跡があり、更に六百餘段の石段を登りつくすと、そこが阿彌ヶ峰の頂上で、一世の英傑豊臣秀吉の墓がある。秀吉が薨去した慶長三年から三百年に當る明治三十年に黒田・蜂須賀などの舊大名が豊國會を起し、高さ三丈一尺八寸の五輪の大石塔を建てたが、今もなほ山頂にそびえて四方を睨んでゐるやうに見える。

六、恩賜京都博物館

妙法院の西向ひにある。明治二十八年に帝室博物館として建てられ、大正十三年二月に京都市に下賜されたもので、内には美術工藝品・考古品・古文書の珍しい貴いものや、歴史・風俗の参考品を陳列して、一般人の觀覽に供してゐる。

七、豊國神社

恩賜京都博物館の北隣にある別格官幣社で、豊臣秀吉の靈をまつるために、明治十一年に造營された。唐門は伏見城の遺構といふ國寶建造物で、唐破風の下の梁の上には巧な彫刻が施されてゐる。門前の兩側には秀吉の遺臣等の獻納した石燈籠がいくつも立ち、本殿前向つて左方にある鐵燈籠は當代天下第一の釜大工與二郎の作である。その南方に秀吉の夫人北政所淺野福々をまつる攝社眞照神社がある。

大佛は豊國神社の北隣に在る。秀吉の造顯した方廣寺の大佛は慶長元年の大地震でつぶれ、その子豊臣秀頼の再造した銅の大佛は江戸時代になつて地震のために又も倒れたから間もなく鑄潰して錢とした。表に寛永通寶とあり、裏に文とあるいはゆる文錢で、世にこれは中風を豫防する効があるといひ傳へる。さてその後再造した木像は百年ばかり経て雷火に焼けたから、更に木像大佛を復興しようとしたが、今見る通り半身だけしか出來ず、

妙法院
交通 市電又は市バス東山七通下車
拝観料 大人十錢、小人五錢（團體各半額）
拝観時間 午前七時—午後四時半
拝観所要時間 約二十分

恩賜京都博物館
交通 市電又は市バス東山七條下車
普通觀覽料 大人（十二年以上）十錢、小人（六年以上）五錢
特別觀覽料 一人五十錢、團體觀覽料（二十人以上）大人一人に付五錢、小人同
交通 市電又は市バス七條大和大路下車

眞照神社
交通 市電又は市バス七條大和大路下車
拝観料 大人十錢、小人五錢
拝観時間 午前六時—午後五時半
冬季午前七時—午後四時
拝観所要時間 五分乃至十分

西大谷

交通
市電又は市バス五
條坂下車

佛殿も假屋のまゝである。この佛殿の西南にある鐘はかの大坂陣の口實となつたもので、銘文に「國家安康……君臣豐樂」とあるを、徳川氏の方では「家康を安の字で二つに切り豊臣を君として樂む」と例に讀めるから豊臣氏が徳川氏を呪ふためのものであると解釋したのである。

方廣寺のもとの境内は今の大佛・豊國神社及び博物館の地を合せた程のもので、西面の石垣の石の大きさにも、秀吉の意氣の雄大さがしのばれる。

八、西大谷

大谷といふのは今の知恩院の在るあたりの地名で、もとそこに浄土眞宗の開祖親鸞聖人の廟があつたのを、慶長八年に徳川家康の計らひで、上人の遺體を二に分け、西大谷と東大谷の兩廟所を造つた。

西大谷は眞宗本派本願寺即ち西本願寺の祖廟で、東大路五條の東側にある。眼鏡橋のかゝつた蓮池を皎月池といひ、正門内に本堂があり、阿彌陀如來の木像などが安置され、その背後に黒戸の御所がある。これが西大谷本廟で親鸞の遺骨を納め、左右の石垣の中に顯如以下歴代法主の遺骨を納めてある。門徒の遺骨も顯如によつてそこに納められるので、遺族の人々が絶えず詰めかけ、讀經の聲が山内に溢れてゐる。

清水寺

交通
市電又は市バス五
條坂下車

九、清水寺

西大谷の北の清水坂を東に登りつめると、そこに法相宗の音羽山清水寺がある。西國三十三所第十六番の札所で、坂上田村麻呂の建立したものと云ふ。仁王門・西門・三重塔・鐘樓などの國寶建造物を過ぎ、田村堂・朝倉堂を見、藤橋を渡り、中門を入つて東に進むと本堂がある。屋根を檜皮で葺き舞臺造にした如何にも感じのよい奇麗な建物で、十一面千手觀音菩薩の國寶木像を本尊として安置してある。内陣の前の梁の上には角倉・末吉の二貿易家から奉納した朱印船の額が掲げられ、堂後にも立派な繪額が多く懸けられてある。本堂の東の石段を隔て、釋迦堂・阿彌陀堂・奥の院の三が順次北からいづれも西向に建てられてある。前の石段を南へ下ると音羽の瀧があり、その西一帯は櫻楓の名所で「新高雄の紅葉」は世に知られてゐる。南方の丘上にある美しい三重の塔には千手觀音をまつり、「子安の觀音」として名高い。

地主神社は本堂の背後にあつて地主権現（大國主命・素戔鳴尊・櫛名田姫）をまつてあり、讀の「熊野」にはこの邊の事を細かに讀みこんである。

地主神社の後方谷を隔て、北に清水寺の本坊成就院がある。江戸幕府の末頃に月照・信海といふ兄弟が相ついでこゝの住職となり、勤王の事に盡したために、一層本坊の名を揚げた。その庭は初め相阿彌が造り、のち小堀遠州が補修したといふもので、誠に奥ゆかしい雅味のある名園で、中に豊臣秀吉の寄進したといふ振袖手水鉢がある。

月照と西郷隆盛とは生前極めて親しく、共に尊王攘夷の事に奔走したため、幕府の役人に睨まれ、身邊が危くなつたので、相携へて京都を落ち、終に薩摩湯に身を投じて果てた。

地主神社

八坂の塔

併し隆盛は舟人に救ひ揚げられ、その後明治十年まで存命したが、今は仁王門の東北方に兩志士の記念碑が建てられて、その忠誠を表彰してある。

八坂の塔 清水寺を出て清水坂を二町程西に下ると、北へ下る産寧坂（俗に三年坂といふ）がある。それを下り、西北方に四五町行けばこの八坂の塔に達する。これは往時聖徳太子の建立された法観寺の塔であつて、今あるものは足利義教の再建した國寶五重の塔である。

護國神社

交通
市電又は市バス安井北門道下車

護國神社 はこの塔から東へ坂を二三町登つた靈山の中腹にある。明治の初年に創立されたが、昭和六年に新に美しく再建された。その南方には木戸孝允の勅撰碑・同墓・坂本龍馬・中岡慎太郎・玉松操・梁川星巖・藤本鐵石などの勤王烈士の墓がある。

高臺寺

交通
市電又は市バス安井北門道下車
拜料 大人十錢、團體半額
拜觀時間 午前八時—午後四時

高臺寺 は護國神社の西北下にある臨濟禪宗の寺で、豊臣秀吉の夫人北政所（髪を剃り尼となつてから高臺院湖月尼といつた）が亡夫追善のために建立したもので、表門は伏見城から移した國寶建造物である。このあたりは萩の名所である。小方丈には秀吉夫妻に關係深い遺寶を陳列し、その東方には三江和尚の木像を安置する開山堂がある。前面の庭は小堀遠州の作といひ、淡泊古雅な趣を具へてゐる。更に東に進むと小高い所に靈屋（國寶）があり、中に秀吉夫妻の木像をまつてある。その上の山中にはもと伏見城に在つたといふ時雨亭と傘亭とが相對して立つてゐるが、先年の大風に倒壊してしまつた。

東大谷

交通
市電又は市バス祇園石段下車

一〇、東大谷

眞宗大谷派本願寺即ち東本願寺の祖廟で、圓山公園の東南に接してゐる。松の並樹のある參道を東に進み門を入つて南に行くと、西に茶所・東に阿彌陀堂・行きあたりには納骨受付所がある、そこから東に石段を登り北に折れると右に廟所がある。西大谷の項で説いたやうに、門徒の納骨を請ふもの引きも切らず、香煙林間に充ち滿ち、讀經の聲絶えず山に響いてゐる。

東大谷の北東には時宗の**長樂寺**があり、そこを東に通じ抜け山にさしかゝると、一町半ばかりで尊王の漢學者**賴山陽の墓**が路の左側に在る。山路を四町程登れば**將軍塚**に達する。桓武天皇が平安京を奠められた時玉城鎮護のためにとて、身長八尺の勇將の像を作り、それに甲冑を着せ、弓箭刀劍を帯びさせて、こゝに西向に埋めさせられた塚がそれである。東郷元帥や黒木大將の手植の松がその傍に榮えてゐる。坂上田村麻呂の墓は山科町栗栖野に在つて全く別物である。

一一、圓山公園

東山の麓の中央にある京都市の大公園で、面積三萬坪に近く、中程に名木「祇園の夜櫻」がある。この花は毎年四月七八日頃に満開するので、その頃は周圍に篝火を焚き、雪洞を點して觀客を迎へる。この櫻から東は小川治兵衛の意匠によるもので、池には鯉躍り、噴水あり、小溪の流こゝに注ぎ、石橋溪流にかゝり、櫻楓參差として芝生のあちこちをおほひ、瀧あり、丘あり、石段あり、曲坂あり、諸種の好景に四時人の目を喜ばせる。殊に茶

長樂寺 賴山陽の墓 將軍塚

圓山公園

交通
市電又は市バス祇園石段下車

八坂神社

交通
市電又は市バス
園石段下車

店飯舗が所々に散在してゐるから、悠々腹を満たして観光するに便である。

一三、八坂神社

圓山公園の西にある官幣大社で、素戔鳴尊・櫛名田姫御夫妻神とその御子八柱神をまつてあり、世に祇園さんと呼ぶ。本殿・西樓門・南大鳥居等は何れも國寶建造物であるがその他拜殿・舞臺・神輿舎・攝社・末社などに立派な建物が多し。拜殿の東の松の樹の間にある古い石燈籠は俗に忠盛燈籠と呼ぶ。今から八百年程以前のある夜、平忠盛（清盛の父）が鳥羽法皇の御供をしてこの祇園社にさしかゝつた時、俄に夕立が来て大雨烈しく降り注ぐ中に、頭は針を束ねたやうな形の怪物が、見えたと思ふと忽ち消え、消えたと見るとやがて姿を現はすといつた有様で、隨從の武士たちも身の毛をよだて、誰一人としてこの怪物に近よらうとするものはなかつた。忠盛は法皇の御命をかしこみ、怪物が若し敵對したなら一刀に斬り棄てる身構で抜き足差し足寄りついてよく窺ふと、それはこの社の神主の一人が、例の如く常夜燈に御燈明を上げようとして、この社を指して來る途中で、これも俄夕立に會ひ、取敢へず路傍の麥稈を束ねてそれを頭にかぶり、火種を保たせるために時々その火を吹いては小走りに行くのであつた。法皇は忠盛の沈勇を賞せられ、以後一層の寵愛を加へられたが、その常夜燈こそ今残つてゐる石燈籠であるといふのである。本社にはかの有名な圓山應舉の畫いた鷄圖の衝立がある。

本社の官祭は六月十五日で、私祭は即ち七月十七日の神幸と同二十四日の還幸で、いはゆる祇園祭である。

祇園祭

ゆる祇園祭である。

祇園祭 はもと疫病をはらひ除けるために、今から九百年程前に始まつたものである。今では七月十日に四條大橋の上で御輿洗の神事を行ひ、十一日氏子町内の鉦または山を飾り、それから毎夜その上に集まつて祇園囃子を奏する。十六日を宵山または夜宮といひ、家々の軒には神燈を掲げ、由緒ある毛氈などで室内を飾り、屏風を立て廻し、鉦・山の提燈に火を點じ、盛に祇園囃子を奏する。これを見ようとして人々遠近から集まり四條通は身動きもできない程に賑ふ。十七日の神幸祭には鎌刀・函谷・放下・船鉦や岩戸山以下の山々が行列を組んで、八坂神社の御輿の御旅所に神幸あるを出迎へる。二十四日の還幸祭には別々の山々が御供をして御旅所から氏子町内を廻つて本社に還らせられる御輿三基を御送りする。この祇園祭は日本全國に開えた大祭の一であるが、下に説く賀茂の葵祭と平安神宮の時代祭と染織祭とを合せて「京の四大祭」と呼ぶ。

一三、知恩院

交通
市電又は市バス
園石段下車
拜料
大人十錢、小人四錢
團體（二十五人以上）
普通一人に付六錢
小學生同二錢
午前七時
午後四時
所要時間
約三十分

知恩院は圓山公園の北隣にある淨土宗の總本山で、華頂山大谷寺ともいふ。今から七百年ばかり前に創立されたもので、現在の堂舎は大抵三百年程前に再建され、何れも國寶となつてゐる。山門は徳川秀忠の建てたもので、實に宏壯端嚴である。石段を登り茶所の前に出ると、本堂（御影堂ともいふ）が眼につく。これは東西四十米、南北三十米餘りの大殿堂で、宗祖法然上人（圓光大師または明照大師などともいふ）の影像を本尊として安置

し、後奈良天皇宸筆の「大谷寺」・大正天皇宸筆の「明照」の勅額が内外に掲げられてある。本堂の東南部の垂木の間に一本の傘が差入れてあつて、世にこれを「知恩院の時雨の傘」と傳へてゐる。これは本堂の再建された頃、山内に一匹の白狐がゐて、濡髪童子の妻となり、時の門主雄譽上人に仕へ、佛法の功德にすがらうと朝な夕な勤にも加はつてゐたが、後に上人から南無阿彌陀佛の六字をこの傘に書き與へられ、その効験によつて人間界に化生し得ることとなつたので、報謝としてこれを當山に遺し留め火災を防ぐ呪となすべきことを誓つて立ち去つた。されば爾來これをこゝに納め置くこととしたが、そのためにや明治年間圓山公園の也阿彌から火を出し、當山に延焼した時にも、茶所は類焼したが、本堂は完全に無事であつたといふ。本堂の東に國寶の經藏・勢至堂があり、堂後から衆會堂(俗に千疊敷といふ)・方丈に至る三百間の廻廊は鶯張りと呼ばれ、一步毎に春鶯の聲を聞くやうな妙なる音を出す。大方丈も小方丈も共に木曾の麝香谷から伐り出された特選の檜材で建てられたものといひ、本堂・廻廊と共に國寶になつて居り、尙信を始め狩野家名手の筆に成る襖繪が多い。鐘樓は東南部の山腹にあるが、その大梵鐘は前に述べた大佛方廣寺のそれとそその巨大を争ひ、高さ一丈八尺・口徑九尺・厚さ九寸五分・重さ約二萬貫に近いといはれる。

一四、インクライン 上水道

知恩院の山門前を北に、青蓮院前を過ぎて三條通に出ると、その邊を栗田口といふ。そ

インクライン

交通
市電線上下車

上水道

こから更に東に行き都ホテル下を過ぎると、京都市上水道浄水地やインクラインに達する。明治十五年の頃京都市發展のために琵琶湖の水を市内に疏通し、これによつて漕漕・舟運・上水・發電の利を得ようとして、同二十七年に至り工費百四十二萬圓を投じた第一疏水工事が竣工した。インクラインはその一部で、長さ三百二十間(五百八十餘米)勾配十五分の一の設計で、蹴上の船溜から動物園南の運河までを船臺によつて貨物運搬船を上下させるものである。そして蹴上のダムから十五分の一の落差を以てものすごいまでに落下する水は、二大鐵管で發電所に導かれ、五千七百キロワットの電力を起し、インクラインのドラム運轉・電車・電燈・市内諸工場の動力を供給する。

上水道 は第二疏水工事によつて施設されたもので、明治四十一年に着手し、工費三百萬圓を以て同四十五年に出来あがつた。今は蹴上と松ヶ崎に浄水池を設け、全市百萬の人口にも安んじて衛生的な上水を供給し得ることとなつてゐる。

一五、南 禪 寺

インクラインの下端に近い橋を東に渡つて三町ばかり行くと、臨濟禪宗の總本山である南禪寺の中門に達する。こゝは 龜山上皇の御願により、その離宮の一部を捨て、寺となされたもので、後小松天皇の御代に京五山の順序(第一天龍、第二相國、第三建仁、第四東福、第五萬壽寺)を定められた時、五山の上位に置かれた。江戸時代の初に當寺の金地院から崇傳といふ傑僧が出て、政治的に徳川家康の篤い信任を受けたので、一層本寺の地

南 禪 寺
交通
市電南禪寺前下車
又は市バス
南禪寺下河原町下
車
拜料 大人十錢
小人五錢

位を高め、堂舎の結構も大に整った。

中門の北にある勅使門は禁裡の日華門を賜はつて移建したものといはれ、その東方の三門は藤堂高虎が寛永四年に再建したものであるが、豊臣秀吉の頃に石川五右衛門といふ大賊がこの樓上に潜伏して、久しく發見せられなかつたのを、彼れが或る日この窓から外方を眺望した顔が、中門外の池水に映つたので遂に逮捕せられ、秀吉のために湯釜で煮殺されたと傳へるが、若し事實とすれば彼れが住まつてゐた三門は、藤堂高虎の再建以前のものでなければならぬ。恐らくこれは無實の物語で、彼れは多數の部下を率ゐ、大名の城廓に類する程の堅固な邸宅に住み、大膽に殆ど公然と盜賊を働いたものと想はれる。今の三門は實に壯麗なもので、東福寺・知恩院のそれと共に、京都東山の偉觀と見て誤なからう。その東の佛殿は明治四十一年の再建でまだ新しい。その東上方に昭和四年に出來た寺務所があり、その西北にある大方丈は崇傳が禁裏から拜受した御所の建物であり、それに續く小方丈はまた資福堂といひ、もと伏見桃山の別殿であつたものといふ。何れも國寶建造物で、その襖繪は狩野家諸名手の描いたもので、かの「水呑の虎」は特に人に知られてゐる。庭園は小堀遠州作「虎の子渡し」といふ石庭である。

佛殿の南方林間にある南禪院は、龜山上皇御仙居の上の宮の跡で、庭園は幽雅の趣に富み、その東南方に、龜山天皇の御分骨所があり、東に支那僧寧一山の墓がある。

當寺の塔頭は今十一ばかり残つてゐるが、三門の南の天授庵は林泉の美を以て世に聞え墓地には細川幽齋夫妻・梁川星巖夫妻・横井小楠などの墓があり、その西の眞乘院には山名宗全の墓がある。中門の西南にある金地院は徳川家康の黒衣の宰相といはれる崇傳の出家の寺で、方丈は桃山城の殿舎を移したものとといひ、その庭は小堀遠州作「鶴龜の庭」と傳へられてゐる。

一六、岡崎公園

岡崎公園
交通 市電又は市バス東山二條下車

勸業館
交通 市電又は市バス東山二條下車

美術館
交通 1市電神宮道下車
2市バス平安神宮前
3京阪電車京津線神宮道下車

動物園

白河法皇の建立あらせられた法勝寺を始め、いはゆる六勝寺のあつた跡で、明治三十七年から京都市の公園となつた。總坪數二萬五千餘坪ある。

勸業館 昭和九年九月の關西大風害に倒壊したのを復興、昭和十二年十月竣工した。延床面積三七〇〇坪の近世式鐵筋コンクリート造りで、多少の日本趣味を加へた優雅な建築である。随時展覽會・博覽會等を開催して、殖産興業に貢献してゐる。

美術館 は昭和御大典を永久に記念し奉らんがため、市民の離出による資金百萬圓を以つて建設することに決し、昭和六年起工、同八年十一月に竣工したものである。建坪千四百坪を有し二階建、鐵筋コンクリート造であつて、飽くまでも日本趣味を基調として近世の建築様式を具備した壯麗な大會館である。固よりこの使命は現代の美術品及び美術工藝品の傑作を普く蒐集陳列して一般の觀覽に供し、美術の振興と之れが思想の普及に寄與せんとするものであるから、隨時、市主催の下に文展・美術展などの著名な展覽會を開催し、或は他の團體又は個人の主催にかゝる展覽會のために其會場を提供してゐる。

動物園 は東部にあつて、その名の如くあらゆる禽獸蟲魚を飼養して一般人の觀覽に供

交通
市電又は市バス
物部前下車
観覧料 大人十五銭
小人五銭
團體割引あり
休園日
十二月二十九日
同三十一日

染織祭

してゐる。大正天皇の東宮にましました時御成婚の御慶事の記念として、明治三十五年に市が設立し、翌年四月から開園したものである。境内は櫻の名所の随一であるが、北部には紅葉の風致に富む所もある。

染織祭

本市産業の中樞を占める染織業者の組織する染織講社では、毎年四月上旬（第一若しくは第二土曜日に式典、翌日曜日に行列）その祖神に感謝の意を捧げ且つはその神徳を宣揚するため祭典及び行列を催す、これを染織祭といふ。

各時代風俗行列に奉仕する婦人は市内各遊廓の美妓を選抜したもので、その服装、調度が豊富華麗で、風俗有識者上から見て正確なことは他にその比類がない。これは時代風俗を目のあたり見る最も好い資料である。

その行列は午後一時半京都府廳前に集合して、上古時代機織參進の織女（皇祖天照大神の和袴・荒袴の神衣を奉織する織女が、紡織の器具を捧げて機織に參進する姿を模したもので）、奈良時代歌垣（上古多數の男女が廣い場所に集つて、歌を唱ひ、舞踊して遊んだもので、これは當時の婦女が打ち連れて歌垣の場所へ向ふ有様をあらはしたもので）、平安朝時代やすい花踊（近衛天皇久壽元年に、洛中の兒女が風流を盡し、鼓笛を調べて紫野社に參詣した。其の有様をあらはしたもので）、鎌倉時代女房の物語（婦女が神社や佛閣に參詣する風俗を模したもので）、室町時代諸職の婦人（染織關係の職業に従事する婦人十三種

をあらはしたもので）、桃山時代醍醐の花見（名高い豊公の花見を模したもので、特に北政所を始め、西の九などの婦人が徒歩で出かける行装をあらはしたもので）、江戸時代初期小町踊（七月七日に行はれたもので、京中の兒女が一群をなし、美装して太鼓を打ち舞踏したものをあらはしたもので）、同時代末期京女の晴着姿（公家、武家、町家の婦女等の晴着姿を模したもので）の次第を整へて出發する。

その順路は九太町通を烏丸へ、京都商工會議所前に到り、屋臺から降りて徒歩で烏丸を四條へ、四條を河原町へ、京都市役所前に到り、こゝで歌垣・やすい花踊・小町踊の行列は面白い歌謡に合わせて舞踊し、終つて再び屋臺に乗り、河原町通りを二條へ、二條を東へ至り、疏水二條橋畔で降りて再び徒歩で午後四時半頃祭場へ練り込み、祭神に頼づいて又神前の舞臺で前記のものが舞ひをさめられるのである。

一七、平安神宮

平安神宮
交通
1 市電神宮道下車
2 市バス平安神宮前
3 京阪電車京神線神宮道下車
拝観料（神宮）
大人、小人共十銭
團體二十五人以上
割引あり
拝観時間
夏季午前八時～午後五時
冬季午前九時～午後四時
拜觀所要時間
約三十分

紀念動物園の北西方にある官幣大社で、桓武天皇をまつる。明治二十八年に京都市で平安神宮千百年祭を行ふにあたり、桓武天皇の御思召を追慕し、社殿を建て、御靈をまつり奉らうと企てたが、朝廷では平安神宮といふ社號と官幣大社に列することを許し給ひ、而も御内帑二萬五千圓をさへ賜はつたから、工事は程よく進み、同年二月には社殿も門垣も悉くできあがつた。なほ、この度、孝明天皇の御英靈をもこゝに奉祀申上げることとなつた。疏水の慶流橋の少し北にある大鳥居は昭和三年の御大典を記念するために建てられた

もので、高さ二三米弱・幅一八米餘・柱の直径三・六四米、すべて鐵筋コンクリート造で、外面を朱塗とし木造と同様の感じを有たせることに苦心してある。それから正北二町半のところにある應天門は平安京創始の時の應天門と同じ様式に建てられ、屋根は碧瓦を以て葺き、棟の兩端に鸚尾瓦を載せ、柱・桁などは丹朱を塗り、垂木の鼻は黄土を塗り、漆喰の土壇の上に立つてゐる。南面の「應天門」とある三字は宮小路康文が古様をまねて書いたものである。この門から北方約七〇米の所に龍尾壇があり、その南庭の奥に拜段がある。これは平安京の大極殿をまねて建てられ、寢殿造といふ様式で、五十二本の朱塗圓柱があり、やはり屋根を碧瓦で葺き、鸚尾瓦(金色の)をのせ、木口に黄土を塗り、拜殿の左右に歩廊を各二〇米程出し、更に南に折れて二七米程のび、その端に高樓を設けてある。東のを蒼龍樓・西のを白虎樓といふ。この拜殿の北奥に本殿があり、それは檜の白木造である。境内の東部と北部とは神苑で、社務所の南から出入し得る。池にかゝつた長虹の如き橋、その上に立つてゐる殿舎などさながら龍宮城に遊んだ心地がする。白虎樓裏の枝垂櫻は京の一名勝である。官祭は四月十五日で、私祭は十月二十二日、これを時代祭といふ。

時代祭

明治二十八年に平安京都千百年記念祭を行った時、平安時代から明治の初に至るまで、政治・兵亂・文物・制度の變遷を風俗に現はした行列にしくみ、それを神幸の神輿に供奉せしめたのが時代祭の起りで、毎年十月二十二日即ち 桓武天皇が新帝都たる平安京に入らせ

られた記念の日に行ふのである。その大要を述べると、當日午前八時頃から神幸の行列が動き始め、應天門を出て西に進み、疏水の冷泉橋を渡り、その西岸を南へ、二條通を西へ、河原町通を南へ、市廳舎の行在所に入る。こゝで祭典を行ひ一同拜禮の後風轡は市廳舎前を西に出發し、寺町通を北へ、丸太町を西へ御所宮小路入口内に行き、午後一時時代風俗の行列を従へて丸太町を西へ、烏丸通を南へ、四條通を東へ、河原通を北へ、三條通を東へ、神宮道を北へ、午後四時頃平安神宮へ還幸されるのである。因みに神幸に供奉する時代行列は、各裝束を整へて午前十一時に御苑内大宮御所の南方に集る。その行列は、(一)列外維新勤王隊、(二)列外弓箭隊、(三)第一徳川城使上洛列、(四)第二豊公參朝列、(五)第三織田公上洛列、(六)第四楠公上洛列、(七)第五城南流鎗馬列(鎌倉時代)、(八)第六藤原廷臣參朝列、(九)第七延暦式官出陣列、(十)第八延暦式官參朝列、(十一)神幸列の順序で、人物には織田信長・羽柴秀吉・瀧川一益・丹羽長秀・柴田勝家・楠木正成・同正季・坂上田村麻呂・藤原百川・和氣清麻呂などがあり、この行列の間には平安講社の各區代表者が上下を着し一文字笠を戴いて供奉する。古今一千年間の文物の變遷・服飾の沿革がさながら走馬燈のやうに綿々として眼前に現はれるので、比類稀なる觀物といふべく、殊に慶流橋から應天門の間では列中の槍持・傘持・挾箱持・草履取などが舊幕時代の風體をまねて、手代りと交代するので、見物人はこゝを目がけて特に群集する。

平安神宮の西隣の武徳殿も明治三十二年に平安京の武徳殿をまねて建てたもので、中央を演武場、その他を觀覽席としてある。外に弓術道場二ヶ所と武道専門學校があり、今は

武徳殿
交通
市電又は市バス東
山二條下車

黒谷

交通 市電岡崎岡坊前下車

大日本武徳會の本部として、毎年五月四日全國の武術家を會して、武徳祭を行ひ、武技を競はしめる。

一八、黒谷

平安神宮の北東約三〇〇米のところには、淨土宗鎮西派の總本山金戒光明寺があり、世にこれを黒谷と呼ぶ。淨土宗の開祖法然上人が八百年の昔比叡山の西塔の別所である黒谷を出て、この地に來られ、淨土宗最初の道場とせられたから、人呼んで新黒谷といつたが今では略して單に黒谷といふ。昭和九年四月はかなくも本堂・勅使門・大方丈・小方丈・庫裏などが灰燼に歸したが其の後復興の計畫が進められてゐる。而かも今尙、阿彌陀堂・經藏あり、その東下の極樂橋を渡れば東南に熊谷堂がある。源頼朝の部下にその人ありと知られた熊谷次郎直實も、宇治川・一の谷の合戦に浮世のあぢきなさと武士の殺伐さを厭ひ、こゝに來て法然上人の弟子となり、甲冑を墨染の衣に着かへ、この堂の所に住んで念佛に餘念なかつたといふ。堂内の脇壇には法然母衣絹の像が安置してある。これは上人が五十三歳の時、直實と師弟の約を結び、その記念にとて自像を鏡にうつしながら、無官大夫敦盛の着用してゐた母衣絹に畫いて、直實の蓮生に與へたものと傳へる。こゝから東に數十段の石段を登ると美しい三重の塔がある。これは徳川秀忠の追善のために今から約三百年前に建てられたもので、内には文殊菩薩の木像が安置してある。府下宮津町外の切戸及び奈良縣磯城郡安倍村のと合せて日本三文珠とて世に名高い。塔の周圍は墓地で、その

永觀堂

交通 市バス南郷寺下河原町下車
拜觀料 大人五錢
交通 市電岡崎岡坊前下車

中に尊王論の首唱者として世に聞えた山崎闇齋の墓がある。
黒谷の東方には淨土宗西山派の總本山永觀堂がある。本堂の本尊阿彌陀如來は世に「見かへり本尊」として其の名が高い。

金戒光明寺の北隣にある眞如堂は、眞正極樂寺ともいひ、今から九百年程前に比叡山から移された天台宗の寺で、今の堂塔は約二百餘年前の再建である。表門内には藥師堂・三重塔・地藏堂が西から東へと並び立ち、正面に本堂があり、慈覺大師作と傳へる阿彌陀如來の木像が安置され、その北に元三大師（本名は良源、慈惠大師といふが正しい諡號であるが、永觀三年正月三日に死なれたから、世に元三大師といふ）の畫像をまつた元三大師堂がある。この寺では毎年十一月六日の夜から十六日の朝まで法會を行ふ。俗にこれを十夜といつて名高い。墓地には齋藤利三（春日局の父）の墓などもある。

一九、銀閣 大文字山

交通 市電銀閣寺道下車
又市バス銀閣寺下車
拜觀時間 夏季午後六時迄
冬季午後四時迄
拜觀料 大人二十錢
小人（特別）十錢
小人（普通）五錢
團體（五十人以上）十錢
學生團體 一人に付 十錢
庭園賣物共 十錢
庭園賣物共 五錢

眞如堂前の坂を東北に下つて北行すること約三〇〇米で銀閣寺道に出る。それから東方にまた三〇〇米行くと銀閣寺に達する。これは本名を慈照寺といひ、臨濟禪宗の寺である。足利第六代將軍義政は風流を好み、東山の麓のこの地に林泉を營み銀閣を建て、茶室を設け書畫骨董を集めた。かくて世に義政を東山殿とよんだ。その薨後遺命によつてこの別荘を寺とし、その法號により慈照寺としたのである。佛殿には釋迦如來の像を本尊とし、諸名家の墨蹟を陳列してある。その東に在るのが東求堂で義政生前の持佛堂である。その東

北隅に義政の創意でできた四疊半の茶室があり、特に「同仁齋」と呼ぶ。東求堂の北にもとの泉殿、今は弄清亭といふ閉香の間があり、その庭は近世の營築であるが、近頃（昭和六年）その東端に相阿彌意匠の林泉を發掘し、その復舊に努力されてゐる。銀閣は二階建屋根柿葺の國寶建造物で、下層を心空殿、上層を潮音閣といふ。東方に月待山・西背面に竹林を負ひ、南及東には當年造庭第一人の相阿彌の作つた林泉があり、池泉・瀑瀧・奇石・橋洲・臺丘など程よく配置され、造庭の模範とされてゐる。

我が庵は月待山の麓にてかたぶく空の影をしぞ思ふ

とは義政がこの別荘で詠んだ感懐である。

大文字山 は銀閣寺の東方に聳えるもので、如意ヶ嶽といふ。毎年八月十六日の夕、この山の中腹に松割木を大字形に組み、一齊に點火して盂蘭盆の送火とする。これから大文字山の名が起つたのである。大字の第一畫は長さ七三米（四十間）、第二畫一四五米（八十間）、第三畫二二四米（六十八間）、といふ大きなものである。これに倣つて同夜、金閣寺の附近の大北山で左大文字、上嵯峨の水尾山で鳥居、松ヶ崎の大黒天山で妙法、大宮の西賀茂山で船形の火が點される。

二〇、下鴨 上賀茂兩神社

下賀茂神社

交通
市電河原町今出川
下車又は市バス下

ふ地域があり、官幣大社賀茂御祖神社（世に下鴨神社といふ）はそこに在る。後に説く賀茂別雷神の御母の玉依姫命と、玉依姫命の御父鴨武角見神の二柱がまつられてゐるので御祖といふ。鴨武角見神は 神武天皇の大和御討入に際り、皇軍の御先導をし奉つた八咫鳥で、神武天皇の頃から既にこゝにまつられたといひ傳へる。桓武天皇が平安京を奠めさせられると、上下兩賀茂社を以て玉城の鎮守とされ、二十年一度の改造を命ぜられ、後には山城國の一の宮と定められ、歴代皇室の御尊崇あつく、嵯峨天皇の御代には伊勢皇大神宮に准じて賀茂齋院を置かれ、江戸時代には下鴨神社だけで朱印地五百餘石もあつた。

葵橋から東北を望むと、本社のある糺の森は森々として茂り、如何にも神々しい感じがする。劍先から北に折れ、一の鳥居を過ぎて社地に入ると、東を流れる泉川と西を流れる瀬見の小川を左右に見る。攝社河合神社や神宮寺跡を拜し、二の鳥居・三の鳥居を過ぎると、縁林の間に眼ざめるばかりの朱塗の樓門がある。その内に舞殿、その西に神服殿、その西に供御所、その南に攝社出雲於神社（俗に比良木神社といひ、この近邊に櫛・椿などを植ゑて置くと、いつの間にかすべて柂に變つてしまふといふ）及び雷殿あり、舞殿の北中門、その正北に幣殿、その左右に東御料屋・西御料屋があり、幣殿の北に祝詞屋があり、その北に東本殿（玉依姫命をまつる）・西本殿（鴨武角見神をまつる）がある。舞殿の東方に橋殿、その東北に細殿がある。以上何れも國寶建造物で、古きは寛永年中（今から約三百年前）新しきも文久三年（今から七十年前）の再建で、門廊殿舎のかくまで完備してゐる例は稀である。

上賀茂神社

交通
1 市バス上賀茂下車
2 鞍馬バス又は雲畑バス上賀茂下車
(北大路橋西詰より出立)

下鴨神社から鴨川の堤を西北に浜ること一軒餘で御蘭橋に達する。それを渡つて東に一〇〇米ばかり行けば賀茂別雷神社(世に上賀茂社といふ)の境内である。社傳によれば下鴨社と同じく、神武天皇の御代頃から存した古い社で、桓武天皇以來下鴨社と全く同一の御尊崇をさへげられ、祭儀奉幣等今に至るまで同日同様に行はれる。一の鳥居を入り、兩側の美しい芝生の間を北進すれば、右に御所の屋を見つゝ二の鳥居に達する。こゝを入れば左に細殿と拜殿・右に樂の屋・橋殿・舞殿・土の屋・廳の屋あり、御手洗川の清流には酒殿橋と玉の橋がかゝつてゐる。北西に進むと樓門の前に行く。樓門内には右に幣殿・忌子殿・左に高倉・廻廊があり、中門前に立つて本殿に拜禮する。本社には八の攝社と十四の末社があり、門廊殿舎は下鴨社と常に同じく再建せられ、今は殆ど皆國寶となつてゐる。御歴代天皇の大嘗祭に用ゐられる白酒黒酒の神酒は、上賀茂の造酒人がこの境内に造酒殿を構へて醸醸する習はしである。

葵 祭

葵祭は毎年五月十五日前記賀茂上下兩大社で行はれる大祭で、既に述べた祇園祭・時代祭・染織祭と共に京都の四大祭として世に知られ、中古では單に祭といへばこの祭をさすといふ程に著名であり、石清水八幡宮の祭を南の祭といふに對して、北の祭といつた。社傳によると今から千四百年近くも前の、欽明天皇の御代に、風雨時を得て五穀の豐熟せんことをこの神に祈り、その時馬に鈴をかけ、人に猪懸をかぶらせたが、後には神の夢告によつて神に葵を捧げ、人々も葵の葉と桂の枝をその衣冠に着けるやうになつたといふ。この日の祭儀の概略を記すと、早朝勅使以下の諸役が京都御所に參集し、裝束を整へ列を組み午前八時に西側の公家門から繰出し、南に折れ更に東に向ひ、建禮門前を過ぎ、清和院御門を出て、河原町通を北に、出町から葵橋を渡り、劍先から北行して下鴨神社に入る。行列の順序は警部・看督長代・檢非違使代・火長代・檢非違使・火長・調度掛・童・鉦持等・山城使代・童・雜色・取物・舍人・白丁・退紅(傘・香などを持つ下官)・衛士代・御幣櫃三基・史生代・雜色・白丁・馬部・走馬・馬寮使代・御所車・替牛・和琴・舞人・口取代・勅使・口取代・牽馬・小舍人・陪從・内藏使代で、列中には毎年意匠を新にして花傘を作つて、内藏使代の後に高くさしかざして進行する。

神社では官司以下の神職が早朝から出仕して祭儀の準備を整へ、勅使以下の參向を待受ける。勅使の行列が着すると、舞殿で勅使は宣命を奏し、官司は祝詞をあげる。次に御馬二匹拜殿を三周し、次に陪從駿河歌を唱ひ、舞人は舞殿に昇つて駿河舞を奉仕して神前の式を終へ、次に糺の森で二頭の馬の走馬を行ふ。勅使以下晝食をとり、更に行列を整へて鴨川の西堤を北西に上賀茂社に至り、同様の祭式を行つて今日の葵祭を終へるのである。

二一、大徳寺 船岡山

京都御所の西北方、市電北大路線大徳寺前停留場に近く、臨濟禪宗大徳寺派の大本山である大徳寺がある。今から六百年ばかり前の、後醍醐天皇の御代に創立されたもので、室

大徳寺

交通
市電又は市バス
北大路大徳寺前下
拜觀時間
午前八時―午後四時
(時季により不定)
拜觀料
大人 十錢
學生 半額
團體 二十人以上

船岡山

交通 市電船岡山公園前下車
金閣寺
開寺
拜観時間 四月一日-九月廿六日 午前六時-午後六時
十月一日-三月卅一日 午前八時-午後四時
大人二十錢、學生團體半額、普通團拜観所要時間 約三十分

町時代には南禪寺と共に京五山の上位に置かれ、有名な一休和尚や江戸時代の澤庵和尚はこの寺の住職であった。總門を西に向つて入り約七〇米行くと勅使門がある。その北にある三門は安土桃山時代に茶道の宗匠千利休が建立したと傳へる。それから北に順次佛殿・法堂方丈の南面にある唐門は前に説いた豊國神社のそれや、後に述べる本派本願寺のそれと共に安土桃山時代を代表するに足るもので、その梁の上の彫刻の複雑で生氣あることは誰も感歎する所であり、左甚五郎一派の名手に成つたものに相違ないといはれる。庭は遠い比叡山の景色を取入れたもので、これ等を借景の庭といふ。本寺山内には多くの塔頭（附屬寺のこと）があり、中にも方丈の背後にある眞珠庵は一休和尚の庵室であり、その境内に茶道の開祖珠光の墓がある。また庫裏の西にある聚光院には千利休の墓があり、その西の總見院には織田信長の葬儀場の跡がある。その西方約二〇〇米の所に小堀遠州意匠の庭で名高い孤蓬庵がある。聚光院の南の三玄院の春戸には石田三成の墓、勅使門の南方黄梅院には小早川隆景の墓がある。

二二、金閣寺

船岡山の西方の大北山の南西に金閣寺がある。こゝは足利將軍義満がその職を子義持に譲つて後、別荘を營み、三層の樓閣を構へてそれに金箔を置き、林泉を築き、悠々として

風流に耽つた遺蹟で、その後臨濟禪宗の寺とし、法號によつて鹿苑寺といつたが、世には金閣寺を以て知られる。總門・中門を過ぎ、本堂に入れば、諸種の寶物を陳列して觀覽に供し、庭には「佗助椿」「陸舟松」などの珍木がある。金閣は本堂の西方にあり、南に鏡湖池を控へ、遠く西に衣笠山を負ひ、幽雅にして婉麗を兼ね、公家と武家との兩様を具へてゐる。池には當年の諸大名から獻せしめた巨石を配し、閣は寢殿造から書院造に移らうとする状を示し、下層を法水院・中層を潮音洞・上層を究竟頂といひ、金箔を置いてあるのは上層だけである。北庭の赤松は亭々と高く、金閣とよく調和してゐる。こゝを過ぎて北高地の夕佳亭に至れば、金森宗和といふ茶人の意匠に成る江戸時代初期の茶屋で、南天の床柱・萩の木を用ゐた欄などあつて珍しい。

二三、北野神社

北野神社は贈正一位太政大臣菅原道眞をまつる官幣中社で、市電北野線の終點に近く、金閣寺の東南七町ばかりの所にある。この社は今から約一千年前に創立され、間もなく右大臣の藤原師輔が多額の費用を投じて社殿を完成し、一條天皇の御代から御参拜のための北野行幸が始まり、歴朝の御崇敬もあつく、一般庶民の信仰も極めて深く、毎月二十五日の縁日には境内は参拜者を以て埋められる程である。官祭は八月四日で、私祭としては二月二十五日の梅花祭、十月一日の神幸祭、同四日の還幸祭（以上二を合せて辛酉祭といふ）が世に知られてゐる。市電下の森停留場の北に神苑を設け、その中に石の大鳥居がある。

北野神社

交通 市電北野下車又は市電北野白梅町下車
拜観時間 午前八時-午後五時
拜観料（寶物） 大人二十錢、小人十錢、團體二十人以上一人に付五錢
拜観所要時間 約四十分

平野神社

交通
市電平野神社前下車

南入口の石鳥居をくぐり豊臣秀吉が天正十五年十月一日に大茶の湯の會を開いた跡といふ雪見丘を右に見つゝ北行し、檜皮葺の美しい樓門を通つて中に入ると、右に文子天満宮（七條通大宮西に入る所に住まつてゐた文子といふ女に天満天神の神託があつて、菅公をまつたのが京都での天満宮の起源であるといふ）左に繪馬堂を見る。文子天満宮の北には昭和三年にできた鐵筋コンクリート造東洋趣味の寶物殿があつて、その中には國寶の北野天神縁起繪巻四種を始め、菅公及び北野神社に關する文書・記録・書籍・器物・裝束の類が幾百點となく陳列してある。繪馬堂には今なほ筆跡の上達を望む信者が、時々その書蹟を献納する。その北方に日月星の彫刻を梁上に施した三光門があり、それを入ると國寶建造物の廻廊がある。本殿と共に慶長十二年の頃片桐且元がその主豊臣秀頼の命によつて再建したもので、その由来が本殿前面の欄干の擬寶珠に記されてある。三光門の東北にある古い石燈籠は渡邊綱（源頼光の四天王といはれた一人）の献納したものといふ。その邊には美しい紅白梅の大木があちこちにある。本殿は八棟造といふ建方で、拜殿と幣殿と樂の間と本殿とを連続して建てたものであるため、棟木が七つあつまつてゐるから珍しい。本殿の西と北とには攝社や末社が多くまつられてあるが、特に東門を入つた左側にある地主神社は最も古いものである。本社も西境は紙屋川であるが、その東堤は御土居といふもので豊臣秀吉が京都の市區整理をした時、市の内外を區劃するために設けた土手の名残である。

北野神社の裏門から出て左に折れ、紙屋川の樓橋を渡つて西に一〇〇米程行くと官幣大

社平野神社がある。この社には今木神・久度神・古閑神・比咩神の四柱をまつつてある。拜殿の接材造と神苑の櫻で世に名高い。

二四、二條離宮

二條離宮

交通
市電二條離宮前下車

市電北野線の堀川二條停留場の西にある離宮で、今から三百餘年前に徳川氏が京都に於ける宿館に充てるために築いた城宅である。徳川家康と豊臣秀頼との二條城會見は歴史に名高く、この外徳川家光の將軍宣下・後水尾天皇の行幸・徳川慶喜の大政奉還の上表なども皆こゝで行はれ、記念すべき歴史的舊蹟である。明治の初京都府の管理に屬し、京都府廳をこゝに置き、同六年陸軍省の管轄に移し、同十七年七月から宮内省の手に歸し、離宮とせられて今に及ぶ。大正四年の御大典には、この地内に大饗宴場が設けられたのである。

もと本丸には天守閣もあり立派な城であつたが、度々の災難で失はれ、今は二の丸の殿舎に昔の佛を殘してゐるだけである。東側の大手門を入り樹形を南に廻り、唐門の東のくゞり門を入つて北行すると、桃山時代の特色のある御車寄に達する。これから西北方に第一殿から第五殿まで五の殿舎が皆善美を盡した書院造で建ち並び、殊に第三殿には大廣間があり、第四殿には黒書院、第五殿は白書院で、襖や杉戸には狩野家の名畫があり、床・違棚・窓・御納戸（武者隠）の美しさいかめしさ何れも立派なもので、黒書院の南には八陣の庭があつて小堀遠州の作といふ。城壁の處々には櫓があり、周圍には深い堀をめぐら

し、その外は廣い芝生となつてゐる。この離宮は京都に在る三離宮の一で、他の修學院離宮や桂離宮の茶室を主としたものとは趣を異にしてゐる。

二五、西本願寺

西本願寺
交通 市電又は市バス七條堀川下車
拜觀時間 午前八時—午後四時
拜觀所要時間 約三十分

市電七條堀川停留場の北方約一五〇米の地にある淨土眞宗本願寺派の本山で、本名を本派本願寺といふ。眞宗の開祖親鸞が亡くなられた後、その女豊信尼は父の廟を祇園林の東北（今の知恩院の山門の北）に建て佛寺をも建て、その眞影を安置した。龜山天皇はこれを勅願寺とし、始めて本願寺の號を賜はつた。これが本願寺の起りで、今から約六百六十年前のことである。第八代の法主蓮如の時は應仁の大亂の際で、山法師は横暴を極め本寺を焼打したので、蓮如は開祖の眞影を奉じて諸方を流浪し、のち漸く山科におちついて本寺を再興した。第九代實如の時朝廷に献金した功を以て准門跡を許された。（今門徒が本願寺の法主を御門跡様と尊稱するのはこの故である）第十代證如の時日蓮宗徒に迫られて山科から大阪の石山（今の大阪城址の地）に移つたが、第十一代顯如の時織田信長と六年の間戦を交へ、正親町天皇の勅命によつて和睦し、この際紀伊國鷲の森に移り、更に和泉國貝塚・大阪の天満を経て、今から三百四十年ばかりの昔、豊臣秀吉から現在の所に十萬坪の地を與へられ、三四年の間に堂塔伽藍を完成した。その後二十餘年を経て火災にかゝつたが、間もなく御影堂・阿彌陀堂が再建され、ついで聚樂第や伏見城の建物を寄附されて境内に移建し、現今の美觀を出現した。いま本山の別院は三十六、末寺一萬に近く、信徒五百萬を越えるといふ。

阿彌陀堂は正門内に在る國寶建造物で、東西二十一間（三八米餘）、南北二十三間（約四二米）で、阿彌陀如來の立像を本尊として安置する。御影堂（國寶）はその南に並び、東西二十四間（約四四米）、南北三十一間（約五六米）の大堂で親鸞の木造坐像を本尊とするので御影堂といふ。内陣の正面梁上に掲げてある「見眞」の二大字の額は、親鸞の大師號を 明治天皇が御染筆あらせられたものである。堂前の大銀杏の樹は本寺に火災の起らうとする時水氣を噴いて消止める靈木であるといひ傳へる。その東南方の滴水園といふ庭の中に在る三層の飛雲閣（國寶）はもと聚樂第にあつた優美壯麗な建物で、狩野永徳やその養子山樂の書いた名畫がある。その西に廊下續きで黃鶴臺があり、これも亦豊臣秀吉の用ゐたもので、その浴室もある。庭の東北隅には國寶の鐘樓があり、その鐘はもと太秦の廣隆寺にあつた名鐘である。御影堂の南から南裏へかけては、もと伏見桃山御殿にあつたものが幾つも並んでゐて、皆國寶となつてゐる。即ち唐門・車寄・大玄關・鴻間（大廣間ともいふ）・白書院・黒書院・能舞臺などである。欄間・長押の彫刻の自由で巧妙雄大なこと、襖繪・壁貼付畫の奔放華麗なこと、何れも桃山時代の特色を十分に發揮してゐる。

二六、東本願寺

東本願寺
交通 市電又は市バス東寺東門前下車
2京阪バス東寺下車
拜觀時間 午前八時—午後四時
拜觀所要時間 一時間

西本願寺の西南六〇〇米程の大宮通九條北に在る眞言宗東寺派の總本山で、本名を教王護國寺といふ。今から一千百年程前に空海（弘法大師）が 嵯峨天皇から、東寺を賜はつて

眞言宗の根本道場としたのがその起りで、御歴代天皇の御歸依あつく、殊に 後宇多・後醍醐二天皇などは、格別の御保護を寄せられ、多くの寺領をも賜はつた。今でも一月の八日から一週間御修法を行ひ、今上陛下の御衣を拜禮して、聖壽無疆の御加持を行ひ奉り、のち皇室に返納し奉るを例としてゐる。

北大門（國寶）を入れて約一〇〇米南に行けば八足門（國寶）があり、それを入れれば南に觀音堂がある。これはもと本寺の食堂で、今は千手觀音の立像を本尊としてゐる。昭和六年堂内から火を出して多くの佛像と共に焼失したが、昭和九年四月弘法大師千百年忌を機として再建された。その南に國寶の講堂金堂（本尊大日如來）が順に並び立つてゐる。豊臣秀吉夫人・同秀頼の再建したもので何れも宏壯である。南に南大門（國寶）・東南に五重の塔（國寶、徳川家光再建、高さ百八十三尺七寸一約五六米）・東に校倉（國寶、經藏）・西北に大師堂（國寶、弘法大師の坐像を本尊とす）がある。八足門外の東側には塔頭の觀智院がある。後宇多法皇の御創立で、今は慶長年間の再建にかゝる國寶の本堂・書院があり、襖繪は宮本武藏・長澤蘆雪らの筆で、五大虚空藏の銅像は支那から傳來の國寶佛であり、經藏には經典書籍の珍品が甚だ多く藏せられてゐる。

二七、東 本 願 寺

東本願寺
交通 市電又は市バス東本願寺下車
拜觀時間 午前九時—午後五時
拜觀所要時間 約一時間半

京都驛の北方約四〇〇米にある眞宗大谷派の本山で、本名を大谷派本願寺といふ。徳川家康は本願寺の勢力の侮るべからざるを知り、今から三百餘年前それを二分して兩本願寺

とし、第二十代教如を以て東本願寺の門主とした。本寺の堂宇はその後再三の火災に罹つたので、今見る諸堂は明治年間に再建されたものばかりである。

烏丸通に面し菊御紋章の金色に輝く勅使門と山門とは、共に明治四十四年に落成したもので、山門の莊重端嚴さは特に人目をひくものがある。山門の西方にある御影堂は大師堂または開山堂ともいひ、親鸞の木造坐像を本尊として安置し、東西三十二間（約六〇米）・南北三十五間（約六四米）・棟高二十一間餘（約三八米強）の大堂で、木造建築としては世界無比の廣大なものである。これと廊下續きで南に阿彌陀堂があり、阿彌陀如來の木造立像を本尊として安置してある。廊下の側にある毛綱はこの兩堂の巨材を運び或は上方に揚げる時に用ゐたロープで、皆當時の信徒が翠の髪を剪つて獻納したものである。大師堂の梁上に 明治天皇御坐筆の「見眞」の二大字の勅額を掲げることが西本願寺と同一であるが原本の勅額は一年交代に兩本願寺の間で保管されるから、他の一本は模本である。鐘樓・大寢殿・小寢殿・白書院・黒書院・能舞臺・集會所など何れも明治二十八年から同四十四年までの造立である。現今別院は五十二、末寺は八千三百餘、門徒約六百萬人に及ぶといふ。史蹟名勝勝成園は本寺の東約五〇〇米のところであり、世に枳殼邸と云ふ。

二八、新 京 極 鴨 川

涉成園（枳殼邸）
交通 市電又は市バス河原町正西下車
新 京 極
交通 市電又は市バス新京極下車
市電又は市バス河原町三條下車

豊臣秀吉が京都の市區を整へるにあたり、もと洛中にあつた寺院を洛外に移し、地を與へて堂宇を建てさせた。その結果東京極を寺町通と呼ぶことゝなつた。新京極はこの寺

鴨川

町通の東に接し、三條通と四條通との間を南北に通ずる街路であるから、新京極と名づけ
たのである。もとは浄土宗の誓願寺の境内であつたが、明治五年にこの新道を開通し、兩側
に商店を建て、繁華な商區とし、明治の末年には更に第二新京極をも作つた。こゝは市中
最も繁華な地區で、演劇・活動寫眞・落語・講談・萬歳などの興行場を始め、バー・カフェ
・レストラン・飲食店・撞球場・雜貨店など立ち並び、遊覽の客晝夜となく雜沓する。
河原町通 は寺町通の東一町餘（一二〇米程）の街路で、昭和二年に擴築し電車軌道を
敷き、近代式の店を開いたので、四條通と並んで盛り場に數へられ、その三條五條間は毎
夜夜店を出し、プロムナードとして聞えることゝなつた。

賀茂川 は鴨川とも書く。山城・丹波兩國の境にそびゆる棧敷ヶ嶽にその源を發し、南
東に流れて鞍馬川・貴船川を合せ、下鴨神社の南で高野川を容れ、市中を南流し、更に西
南流して桂川に入る。長さ約一二軒。水質染物に適し、鴨川染・友禪染に利用される。

四條大橋 は三條大橋・五條大橋と共に昔からの官橋で、今から八百年程以前に始めて
架けられたといふ。今の橋は大正二年にできたもので、現代式鐵筋コンクリート造とし、
外面に石材を用ひ、橋面をアスファルトで鋪裝し、勾欄は金屬製で、所々に燈籠を設けて
ある。長さ九〇米餘・幅二二米弱で、中央に電車軌道を敷いてある。

都踊 は毎年四月一日からその末日まで、四條大橋の南東の歌舞練場で催される舞踊
で、京都名物の一である。登場人員は地方十二人・難方十二人・踊子二十八人を一隊とし、
祇園新地から四隊の演者を選出し、四日間で一巡し交代する定めである。踊子は華麗な揃

交通
市電又は市バス花
見小路下車

鴨川踊

交通
市電又は市バス河
原町三條下車

の衣裳を着、一樣の美しい花扇を持ち、歌の曲につれて兩花道から練り出し、舞臺に上つ
て踊る。その美しさあでやかさに見物の人々は皆酔はされる。

鴨川踊 は先斗町（鴨川の西畔で三條通と四條通の間をいふ）の歌舞練場で、毎年五月
一日から五月二十四日まで行ふ舞踊で、また京名物の一である。大舞踊場は昭和二年にで
きた鐵筋鐵骨兩用コンクリート造で、外觀は近代式東洋趣味の洋館で、内部は善美を盡し
た装置である。舞臺は一階に設けられ、その他地階・二階・三階・四階まであり、種々の
室々が十分に取られてある。登場人員は地方二十人・難方十人・踊子二十八人すべて五十
八人を一組とし、先斗町から四組を選出し、四日で一巡交代することゝなつてゐる。その
美しさと、あでやかさは、都踊と甲乙が附けがたい。

二九、比叡山 延暦寺

下鴨神社の東南約三〇〇米、葵橋の東約一二〇米の出町柳驛から、叡山電鐵の電車に
乗り、元田中・茶山・一乗寺・修學院・山端（鞍馬電鐵の分岐點）・三宅八幡の各驛三哩
半の平坦線を過ぎると、終點八瀬驛に着く。この間十八分かゝる。こゝから遊園地を経て
西塔橋を渡ると、比叡登山ケーブルの起點西塔橋驛である。こゝから延長一、四五八米餘、
角度二十餘度のケーブルで九分間上昇すると、終點四明ヶ嶽驛に達する。こゝから東行三
〇〇米程で蛇ヶ池遊園地に至り、東南方に轉じて更に三〇〇米登れば比叡山頂將門岩に着
く。なほ延暦寺に直行しようとする者は、四明ヶ嶽から北東に四〇〇米程行き、高祖谷驛

比叡山
1 市電叡山電線前下
車又は市バス葵橋
下車
2 叡山電車四明ヶ嶽下
車
出町柳驛一八橋驛
（平田橋）
西塔橋驛一四明ヶ嶽
（ケーブル）

延 曆 寺

拜観料(根本中堂) 十錢
 團體割引 五十人以上
 普通 三割引
 小學生 五割引
 百人以上 三割引
 小學生 七割引
 拜観時間 午前八時—午後五時
 (時季により増減することもある)

から空中索道によつて六四一米餘東方の延暦寺驛に至り、それから東南に徒歩七〇〇米ばかりで根本中堂に達するのである。

比叡山 は京都府と滋賀縣に跨る雲山で、海拔八四三米あり、東に琵琶湖を瞰下し、遠く伊吹山脈を隔て、飛騨山脈の山々を望み得る。また西南は京都市を経て淀川を一目の下に集め遙に金剛山脈を指すことができる。

延暦寺 はこの山の滋賀縣の部に在る天台宗の總本山で、山内を東塔・西塔・無動寺・横川の四區に大別する。本寺は傳教大師が今から一千百餘年前に草創されたもので、御歴代皇室の篤い御尊信と公家武家の歸依を受け、その僧侶山法師は勢に任せて一時横暴を極め、白河法皇さへも備まし奉つたのである。然し、後醍醐天皇の御代には一方ならぬ忠誠を盡した。今から三百五十年程前に織田信長の焼打ちに遇ひ、東塔・西塔以下の堂塔房舎山王二十一社の祠殿を悉く焼失したが、豊臣秀吉・徳川家光等の援助によつて再建を完成し、現在の盛觀を見るに至つた。

四明ヶ嶽の觀測所傍から坂路を北に降り、東に折れて五〇〇米行けば山王院に達する。こゝには千手觀音がまつられてあるので、千手堂ともいふ。こゝから南行一五〇米で辨慶水がある。その東方三〇〇米で戒壇院がある。こゝは僧侶が大乗戒を授かる所で、その東下に大講堂(國寶・本尊大日如來)があり、その東北二〇〇米の所に根本中堂がある。こゝは延暦寺の最初の地で、薬師如來を本尊とし、壯嚴極まりない堂舎で、桁行百二十四尺(三七七米餘)、梁間七十八尺(二四米弱)、高さ棟まで八十尺餘(二四米餘)あり、これに

廻廊をめぐらし、端麗な感じを持たせる。根本中堂から南に行けば無動寺明玉堂に向ふが、中腹に坂本ケイブルがある。これによつて降り、約二〇〇米ばかり西北に登れば官幣大社日吉神社(祭神一の宮は大山咋神・二の宮は大物主神)があり、國寶建造物も多く、珍しい日吉鳥居もある。

三〇、八 瀬 大 原

八 瀬 ・ 大 原

1 經路 市電叡山電線前下車又は市バス叡橋
 2 叡山電車八瀬下車
 3 大原へはこゝより乗合自動車あり大原下車

八瀬の里の名はこゝを貫流する高野川に瀬が多いから起つたと傳へる。昔から皇室の駕輿丁を勤める八瀬の童子はこの村民から出るので、御大喪の際の葱華轡を昇いたり、即位の大禮の節の賢所の御羽車を昇くことは今でもこの村の童子が奉仕する。

この村とその北の大原村の婦女子は、紺衣に御所染の帯をしめ、白の脚絆甲掛をつけ、籠模様の手拭を頭にかぶつて、繡・佛花・番茶・柴などを頭上に載せ、毎朝市中に来てそれを賣り歩く風がある。世にこれを大原女といふ。惟喬親王舊跡は大原村大字小野に在る。親王は、文徳天皇の皇長子で、賢明の聞えが高かつたが、藤原良房の女、明子の腹に惟仁親王がお生れになつたため、皇太子にも立たせられず、失意の餘り、剃髮して佛道に入り、この小野の里に閑居して、御心を詩歌に委ねられた。歌人在原業平は親王に仕へた一人であつたから、屢こゝに来て慰め奉つた。或る時の歌に「忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは」とある。

三千院 は梶井宮の門跡寺で、天台三門跡の一に數へられる。今の宸殿は天正年間の再

寂光院

建、書院は近年の修築にかゝる。國寶の往生極樂院は今から約九百年前に建てられたもので、屋根裏が化粧垂木の船底天井になり、本尊阿彌陀如来や、脇侍觀音・勢至兩菩薩は皆國寶で、惠心僧都の作といはれる。こゝは秋の紅葉の名所で、杖を曳く人が少くない。三千院境内には、後鳥羽天皇・順徳天皇の大原御陵がある。

寂光院 は大原村草生にある天台宗の尼寺で、平家物語の大原御幸によつて、特にその名を知られた。壽永四年三月平家の一門が長門の壇の浦で亡びた時、安徳天皇の御生母である建禮門院（平徳子）にも入水なされたが、心ならずも東國の武士に救ひ上げられ、再び御入洛になつて、東山の長樂寺で御髪を下ろされて尼となり、やがて大原の奥のこの寺に入つて、亡き 高倉上皇や 安徳天皇の御菩提をとむらはせられ、「思ひきや深山の奥にすまゐして雲居の月をよそに見んとは」「今や夢昔や夢とまよはれていかに思へどうつゝともなき」など詠ませられ、わびしい年月を送られて、のちこの寺で崩御あらせられた。本尊は地藏菩薩で、外に建禮門院の木像や張子の像がある。こゝも亦紅葉の名所である。

三一、鞍馬寺

鞍馬寺
A 經路
1 市電 鞍馬山電 鞍馬下
車又は市バス 鞍馬橋
2 鞍馬電車 鞍馬下車
B コリス
1 市電又は市バス 北
2 鞍馬西詰下車
鞍馬下車

出町柳驛から鞍馬電車に乗り、山端驛で叡山電鐵線と別れ、三宅八幡前・岩倉・木野・市原・二の瀬・貴船口諸驛を過ぎ、約二十五分で鞍馬驛に達する。下車して一〇〇米程行けば鞍馬寺の樓門を見る。
本寺は今から一千百年程前に、藤原伊勢人の建てた天台宗の寺で、平安王城の北方守護

由岐神社

佛として名高く、朝野の崇敬を受けたものである。樓門は仁王を安置した宏壯な門で、それから三〇〇米程登れば大巳貴命を祀つた**由岐神社**があり、その拜殿はいはゆる荷堂の形をなし國寶である。本殿の背後には源義經が少年の時遮那王といつて住してゐた東光坊の跡がある。こゝから本堂まで約九〇〇米ばかりは「九折」坂とて屈曲した急坂であるが、春の櫻・秋の紅葉の景色は洵によく、その名四方に聞えてゐる。寢殿本坊の傍を過ぎて北に登れば本堂である。これは明治五年の再建で、本尊には國寶の毘沙門天王が安置され、堂前には國寶の珍しい鐵燈籠があり、本堂の西には護摩堂がある。本寺の境内からは昭和六年に百餘點といふ多数の珍品を發掘し、寶物殿に陳列されてある。護摩堂の側から奥の院に向へば、途中不動堂・義經背比石・大杉を経て僧正谷に至りこゝに魔王堂があつて奥の院になつてゐる。

三二、御室 妙心寺 廣隆寺

北野神社の西南に在る嵐山電車北野起點から電車に乗り、約十分で御室停留場に着き、下車して北行約一五〇米で**仁和寺**の樓門に達する。本寺は 光孝天皇の勅願で今から一千年ばかり前に創立された眞言宗の大寺で、宇多法皇がこゝに入らせられてから御室と呼ばれるに至つた。その後火災にかゝり一時衰へてゐたが、今から三百年程前に朝廷から紫宸殿・清凉殿などの殿舎を賜はつて移建し、將軍徳川家光も厚い庇護を加へたので、完全に再興した。樓門は即ち仁王門で壯麗人の目をひく。中に入れば左側に寺務所があり。その

御室仁和寺
A 經路
1 市電 北野下車
2 嵐山電車 御室下車
B コリス
1 市電又は市バス 千
本丸太町下車
2 嵐山バス 御室下車
拜 觀 料
大人 廿 錢、小人 十
錢、團體 引 十 錢以上
團體 引 十 錢以上
拜 觀 料
一人に付 十 錢
拜 觀 料
所要時間 約 四十分

境内に宸殿(大正二年再建)・方丈・唐門・庫裏・林泉など美しく清々しいものがある。仁王門の北方には右に一株の老松があり、左に櫻樹がある。これは世に聞えた御室の樓で、厚物(八重櫻のこと)多く、毎年四月二十日頃が満開期である。その東方松林の間には國寶の五重塔が美しく立ち、その附近は霧島つゝじの名所である。更に北に進めば國寶の金堂(紫宸殿を移したもので、彌陀三尊を本尊として安置してある)・同じく御影堂(もと清涼殿、今弘法大師の木像を本尊としてまつる)があり、その西南の觀音堂、東に經藏・鐘樓などがある。背後の大内山には約百年前に開かれた御室八十八ヶ所がある。また近年五重塔の南に寶物館を建て、中に國寶の佛像・古器・古文書を始め多くの寶物を陳列し、展覽に便にしてある。

本寺の東南約三〇〇米の地に臨濟禪宗妙心寺派の大本山なる妙心寺がある。これは今から六百年程前に 花園上皇の御願で創立され、その後應仁の大亂に焼失したが、やがて雪江和尚が中興して再建した。七堂廻藍の完備した禪寺として世に知られ、堂宇は殆んど皆國寶となつてゐる。今こゝに南表門から拜觀するものとして説明する。南表門の西方には勅使門、その北方には三門、順次北に佛殿(釋迦如來を本尊とす)・法堂・寢殿がある。寢殿の東に大方丈、更に東に小方丈がある。法堂の西北に鐘樓があり、その鐘は奈良朝前期の鑄造にかゝる國寶の古名鐘である。本寺の塔頭も亦よく美觀を保ち、その數も少くない。殊に玉鳳院(花園法皇の御室で、世に萩原御殿といふ)・微笑庵(開山堂ともいひ本寺の開山關山無相國師の木像をまつる)・東海庵・天授院・靈雲院(世に元信寺といふ。古法眼

妙心寺

- A 經路 コリス
- 1 市電北野下車
- 2 嵐山電車妙心寺前下車
- B コリス
- 1 市電又は市バス千本九太町下車
- 2 嵐山バス妙心寺前門下車
- C コリス
- 省線花園驛下車

廣隆寺

- 1 經路 市電又は市バス四條大宮下車
- 2 嵐山電車太子前下車
- 拜觀時間 午後五時
- 拜觀料 大人卅錢、小人十五錢、團體三十人以上半額、學生任意
- 拜觀所要時間 卅分
- 講堂拜觀卅分
- 講堂拜觀卅分

狩野元信のかいた襖繪が多いからである)・春光院(南蠻寺の鐘と傳へる西洋紀元一五七七の銘の入つたベルを有してゐる)・天球院(狩野山樂の襖繪がある)・大法院(幕末の志士贈正四位佐間象山の墓がある)などは人に知られてゐる。

妙心寺の西南六〇〇米ばかりの所、嵐山電車太子前停留場の西北に廣隆寺がある。これは今から一千三百年程前に聖德太子の御旨を奉じ、佛法興隆のために秦河勝が創建したもので、今は眞言宗の別格本山である。樓門は仁和寺と同じく美しく嚴かな仁王門で、中に入れば左に假金堂がある。本尊は藥師如來の木像で、その北に地藏堂がある。この二堂の前は毎年十月十二日の夜、太秦の牛祭といふ奇體な行事をする所である。その東に國寶の講堂がある。これは今から八百年程前に藤原信賴の再建したもので、世に赤堂と呼ばれ、内には國寶の阿彌陀如來・千手觀音の木像が安置してある。その北に秦河勝をまつつた太秦殿があり、更にその北に太子堂がある。これは正しくは上宮王院といひ、聖德太子三十三歳の時の御自作と傳へる木像を安置す。近世に至り歴代天皇の御即位禮に用ゐさせられた黄檗染の御袍を賜はり、それをこの像に着せまゐらせる例となつたので、現に昭和三年の大典の節の御袍と同じ御袍が着せられてあるといふ。西に客殿及び庫裏があつて、その庭上に太秦形とて珍しがられる石燈籠がある。太子堂の北五〇米に靈寶殿があつて、國寶の佛像書畫を始め當山の寶物が夥しく陳列されてゐる。庫裏の西方約一〇〇米の所に國寶の桂宮院(鎌倉時代の八角圓堂で、中央に聖德太子十六歳の時の御自作と傳へる木像を安置す)がある。

神高
護
寺雄

A 経路
B コリス
C 下車
D 下車
E 下車
F 下車
G 下車
H 下車
I 下車
J 下車
K 下車
L 下車
M 下車
N 下車
O 下車
P 下車
Q 下車
R 下車
S 下車
T 下車
U 下車
V 下車
W 下車
X 下車
Y 下車
Z 下車

西横
明
寺尾

十月十二日の牛祭は世に「見るも阿呆、見ぬも阿呆」といふ奇祭で、主役は摩訶羅神で、大牛に跨り青鬼赤鬼の四天王に守られつゝ境内假金堂前に来て、意味の判らぬ祭文を読み上げる。

三三、高 雄

嵐山電車高雄口停留場から約六軒の所、清瀧川の岸には、紅葉を以て天下に知られた高雄がある。朱塗りの橋を渡り屈曲した坂を西に登ると神護寺の境内で、額書石は弘法大師がこの寺にみて額を書く時に、この石を硯として墨を磨り金剛定寺の四大字を書いて勅命に應へたといふものである。仁王門を入つて一〇〇米程の所に和氣清麻呂の廟があり、その脇にその墓道（墓へは約三〇〇米ある）がある。金堂はその西南にあつて國寶の薬師如来像を本尊とし、講堂はその北に在つて五大堂ともいひ、國寶の五大尊や五大虚空蔵の像を安置する。本堂の西には國寶の弘法大師像を本尊とする大師堂があり、東北の鐘樓の鐘は世に「三絶の鐘」といふ名鐘で、今から一千年程前に橋廣相の序文・菅原是善の銘文を藤原敏行が書いてそれを刻した鐘である。更に奥に進めば地藏院に達する。その堂前は清瀧川を脚下に見おろす断崖で、土器投げに興ずるものが多い。本寺は今から一千年程前に建てられた古寺で、弘法大師・文覺上人を始め名僧が住まつたこともあり、今眞言宗の別格本山となつてゐる。

神護寺からもとの朱塗橋を渡り、清瀧川に沿うて約七〇〇米を上流に行けば眞言宗の西

高根
山
寺尾

嵐山

A 経路
B コリス
C 下車
D 下車
E 下車
F 下車
G 下車
H 下車
I 下車
J 下車
K 下車
L 下車
M 下車
N 下車
O 下車
P 下車
Q 下車
R 下車
S 下車
T 下車
U 下車
V 下車
W 下車
X 下車
Y 下車
Z 下車

明寺に達する。ここは横尾といひ紅葉の一名所である。

西明寺から更に川に沿うて約五〇〇米上れば、また紅葉に名を得た眞言宗の桐尾山高山寺に達する。今から五百年程前の大徳明恵上人の興した寺で、國寶の石水院を始め堂坊・茶室に美しい建物がある。此の地は高雄・横尾と合せて世に三尾といひ、眞言宗の古刹と秋の紅葉とにその名をとゞろかしてゐる。

三四、嵐山 大堰川

嵐山は京都の西部に連なる愛宕山脈中の一山で、春の櫻と秋の紅葉の名勝である。櫻は今から六百五十年程前に吉野から移植したものであるが、楓は既に一千年も前から名所に数へられてゐた。中腹に黄檗禪宗の大徳閣（千光寺）があつて、角倉了以の木像をまつり、その記念碑もある。大堰川は京都府北桑田郡の山谷からその源を發し、船井郡を過ぎ南桑田郡保津村あたりに来て保津川と呼ばれ、嵐山の下を流れる所では急流となつて奔下し、渡月橋あたりで大堰川といひ、更に下つて桂川となり、遂に淀川に入る。この川は急流である上に岩石處々に横はり、船筏を通すべくもなかつたが、今から三百餘年前に嵯峨の人角倉了以が、少からぬ辛勞を費して開通し、今見るやうに船筏をたやすく通じ得ることとなつた。渡月橋の上三〇〇米ばかりの左岸に千鳥淵といふ深みがあり、今から八百年程前に横笛といふ女官の一人が、北面の武士瀧口入道に心を寄せ、世をはかなんで身をこゝに投じたといひ傳へる。この淵の上が嵐山公園で、園内に角倉了以の銅像と記功碑があ

天龍寺

る。渡月橋の上（ぶつげきょう）一五〇米ばかりの左岸に小督（こくう）の墓と傳へるものがある。小督局は今から七百五十年程前の 高倉天皇の御寵愛の女官であつたが、平清盛がその女徳子（むすめ）を 天皇の中宮に納れ奉り、その御寵愛を専らにしようと思つたため、宮中から逐ひ出されて、嵯野の奥のこゝに來、うき年月を送つて後遂にはかなくなつたといふのである。

大覺寺

渡月橋の北方二〇〇米ばかりの西側にある臨濟禪宗天龍寺派の大本山の天龍寺は、足利尊氏・直義兄弟が、後醍醐天皇の崩後、その御高恩にむくい奉るために、夢窓國師の勸めを用ひて創建した寺で、京五山の第一に數へられるものである。

車折神社

大覺寺 は古義眞言宗の大本山で、今から一千餘年前に、嵯峨上皇の離宮を寺に改められたものである。歴代天皇の入御遊ばされたこともあり、宮門跡として世に知られ、嵯峨御所ともいはれる。五百四十餘年前に大覺寺統の諸上皇がこゝに入らせられ、殊に 後龜山天皇が吉野から還幸の時には、先づこの寺に入らせられ 後小松天皇に父子の約を以て皇位を譲らせられたのである。

舟遊祭

渡月橋の北東東五〇〇米の地には右大臣清原頼業（今から七百五十年程前の人）をまつた車折神社がある。いつの頃にやこの社前を牛車（うしぐるま）に乗つて通りかゝつたある人の車が折れ牛は倒れたので、この社名が起つたといふ。今は貸金回収の神として信仰せられる。毎年五月十四日にはこの社から御座船（神霊）・詩歌船・舞樂船（龍頭）・管絃船（鷓首）と隨侍船を出し、大堰川にそれを浮べて、渡月橋の上流で神事を行ひ、舟からは古風な扇を投げゑる。これは 醍醐天皇の御代に行はれた大堰川行幸の故事を記念するもので、世に舟遊祭と呼んでゐる。

三五、水 尾

天龍寺門前の嵐山驛から愛宕電車に乗れば、十五分ばかりで終點清瀧驛に達し、徒歩清瀧川の橋を渡れば、二〇〇米ばかりで愛宕ケーブルの起點に着く。こゝからケーブルを利用し七分程にして愛宕山の頂上附近に至る。この山は海拔一〇〇〇米に近く、頂上には伊弉冉（いさな）尊外五柱をまつた府社愛宕神社があり、今は火難除の神として崇信せられる。附近にスキー場もあつて四時登覽の客が絶えない。

- 愛宕山・愛宕神社
- 1 市電北野下車或は市電又は市バス四條大宮下車
 - 2 嵐山電車嵐山下車
 - 3 愛宕電車清瀧下車
 - 4 愛宕ケーブル愛宕下車
- 水尾
- A 經路 前記愛宕ケーブル歩約二軒より西へ徒歩約二軒
 - B コリス 驛よりガソリン車に依り保津驛に下り保津驛から北へ徒歩約二軒
- 清和天皇御陵
- 一般の列車は停らない

圓覺寺

水尾は嵯峨の一部落で、山間の別天地をなしてゐる。東北に愛宕山を負ひ、西と南は山地を以て丹波の保津村に連なる。

清和天皇水尾陵は水尾部落の山上に在る。天皇は御九歳で皇位に即かせられ、御在位十八年間にいはゆる貞觀（じやんくわん）の善政を布かせられたが、御兄惟喬親王を超えて御即位されたことを心安からず思召したのと、外戚藤原氏の事横を口惜しく思召したためにや、御年二十七の時皇位を 陽成天皇にお譲りになり、やがて御落飾入道あつて、専ら佛道を修め、常人の堪へ難い苦行を積ませられ、元慶四年十二月四日寶算三十一歳を以て粟田の圓覺寺で崩御あらせられた。天皇御生前この地に隱棲あらせられようとの御遺志を酌み奉り、御遺骨を水尾に納め奉つたのが今の御陵である。

圓覺寺はもと粟田に在つたが、天皇御終焉の地である因縁で、今から約五百年前の應永

清和神社

二十七年に、粟田から水尾山寺の遺址に移した。今浄土宗知恩院の末寺となつてゐる。本尊薬師如来は天皇の御持佛と稱へ、本寺には外に貞観寺の本尊といふ觀世音、禪門寺の本尊といふ阿彌陀如来の像をも安置してある。

清和神社は圓覺寺の傍に在つて、四所神社と共に水尾の氏神と崇められ、毎年五月三日の例祭には、花笠踊といふ古樸な行事があつた。

松尾神社

三六、松尾神社 西芳寺

A 経路 1 市電又は市バス四
2 京阪電車新京阪線
松尾下車
B コース 1 市電又は市バス千
本九太町下車
2 嵐山バス松尾神社
前下車

松尾神社 は松尾上山田に在る官幣大社で、今から一千二百餘年前に秦都理が創立した。大山咋命・市杵島姫命を祭神とし、神幸祭は四月の卯の日、還幸祭は五月の酉の日である。酒造の守護神として全国の造酒家が崇敬する。本殿は今から四百年前頃に再建され、その後再三修理を加へられた立派な國寶建造物である。

西芳寺

A 経路 前記松尾神社に於
けるAコースと同
様
B コース 1 市電又は市バス千
本九太町下車
2 嵐山バス西芳寺前
下車

西芳寺 は松尾神ヶ谷に在る臨濟禪宗天龍寺派の寺で、今から一千二百餘年前に、行基菩薩が開基され、のち夢窓國師が中興したと傳へる。本堂の後山に行基の行基と傳へる舊跡があり、境内東南部の林泉は夢窓國師の作庭で、各種の苔にとみ、世に苔寺といふ。茶室の湘南亭は國寶である。

山科

A 経路 1 市電又は市バス河
原町三條下車
2 京阪電車京津線山
科駅前下車
C コース 省線山科駅前下車

三七、山科

山科はもと山城國宇治郡の一村で、藤原鎌足の居住した頃には山階と書いた。京白河からは日阿越・澁谷越・滑石越の三方面から達せられる。

岩屋寺

C コース 京都市内三條大橋
東山七條より京阪
乗合自動車あり
交通 京阪バス勸修寺前
下車

岩屋寺 は山科西野に在る曹洞禪宗の寺で、神遊山と號す。本堂は明暦年間の再建といひ傳へる。元祿十四年赤穂城主淺野長矩が殿中刃傷の咎によつて切腹すると、遺臣城代家老大石良雄は主家の再興を願出たが、つひに允許せられなかつたので、主の仇吉良義央に報復してその鬱憤をはらさうと決意し、その謀計を睥睨すため、當寺境内に邸宅を營み、隠棲して時機を窺ひ、翌十五年十二月他の四十六士と共に本望を達したことは世人の周知する所である。良雄はその後邸宅田地遺財を擧げて當寺に寄進して、わが後世の菩提を弔はんことを託したといふ。木像堂には淺野長矩を始め四十七義士の木像を安置し、更に位牌をまつてある。

大石神社

交通 京阪バス勸修寺前
下車

大石神社 は岩屋寺の隣接地に在る。四十七義士の忠烈は古來世人の崇仰措く能はざる所で、その首領大石良雄を祀つた社寺は諸處に存するが、近年京都府の官民相謀り、良雄隱棲のこの地に神社を創設し、赤穂の大石神社から良雄の神靈を勧請し、昭和十年鎮座祭を行つた。今は府社である。

毘沙門堂

交通 1 京阪電車京津線山
科駅前下車
2 省線山科駅前下車
経路 1 市電又は市バス河
原町三條下車
2 京阪電車京津線又
は京阪バス追分下

毘沙門堂 は山科安祥寺の東北に在る天台宗山門派の門跡である。寺傳によればもと傳教大師自作の毘沙門天像を安置した洛北の出雲寺であつたが、元龜年中織田信長に焼かれ、堂塔伽藍を失し、慶長年中、後陽成天皇の勅旨により、南光坊天海僧正が徳川氏の授護を得てこゝに復興したのが本寺であるといふ。堂舎よく整ひ寶物また夥しく藏せられてゐる。

牛尾山法嚴寺

牛尾山法嚴寺 は山科追分の東南約二軒の牛尾山に在る法相宗の寺で、世に清水寺の奥

の院といふ。清水寺と同じく延暦の昔僧延鎮の開基したものと傳へ、本堂の本尊は千手觀音である。寺域洵に俗界を超絶し、別天地の觀あるのみならず、參路境内春花秋葉の風光甚だ佳く近時參詣者踵を接する程である。

三八、醍醐寺

醍醐寺
交通
京阪バス醍醐三寶院前下車
(五二頁若屋寺の項参照)

醍醐寺 は京都市伏見區醍醐町にある眞言宗の總本山で、今から一千年ばかり前に聖寶(理源大師)の創建したもので、その後賢俊・滿濟・義演などの名僧もこゝから出た。豊臣秀吉がこゝに盛大な花見の宴を張つたことは世に知れ亘つてゐる。徳川氏も代々よくこの寺を保護したので、室町時代の衰運を挽回し、近年殊に寺運隆盛に赴き、堂宇殿舎の整備世に比類少きものとなつた。

上醍醐寺

寺は今上下の兩寺となつてゐるが、山科街道に沿ふ總門を入り、山門(仁王門)を通つて東に進むと國寶の金堂(藥師三尊を安置す)があり、その東に理源大師をまつる開山堂東南に國寶の五重塔(約一千年前の建築)がある。山門の手前の北側の門を入れれば、門跡の住寺であつた三寶院がある。これは豊臣秀吉の保護によつて特に美觀を加へたもので、その大書院は古の寢殿造に倣ひ、西に泉殿、東に釣殿があり、庭は秀吉の意匠に成り、襖繪は狩野山樂・石田幽汀などの名筆のものが多い。その他唐門・枝垂樓など觀るべきものである。下醍醐の金堂から約四軒の坂を登つて深雪山の頂上に行くと、そこに**上醍醐寺**がある。

國寶建造物の清瀧社(龍神をまつる)・藥師堂・經藏(宋版一切經を納めてある)があり、閑靜幽寂の別天地である。一千年の古寺だけあつて古い文書・寫經・名畫・寶物など數萬點に上り國寶だけでも實に夥しいものである。

三九、宇治 萬福寺 平等院

宇治
A 經路
1 市電又は市バス河原町三條下車
2 京阪電車宇治線宇治下車
B コース
省線宇治驛下車
交通
京阪電車宇治線黃檗下車

京阪電車宇治線の黃檗驛の東方約一五〇米に黃檗禪宗の本山**萬福寺**がある。これは今から三百年程前に支那の明から歸化して來た僧隱元の開いたもので、七堂伽藍よく整ひ而も支那風に出来てゐて、皆國寶となつてゐる。總門・三門・天王殿(四天王の木像をまつる)・鐘樓・伽藍堂・禪悅堂(食堂)・齋堂・大雄寶殿(本堂で釋迦如來像を安置す)・法堂・東方丈・西方丈・選佛場(佛殿で觀音像をまつる)・祖師堂(達磨大師をまつる)・鼓樓・開山堂(隱元禪師即ち眞空大師の像をまつる)など前後左右に對立し、さすがは禪の淨境と感ぜしめる。西北方一五〇米ばかりの丘上には有名な鐵眼禪師の作つた一切經七千餘卷の木版を納めた倉が立ち並んでゐる。

山門を出れば日本の茶つみ歌

宇治線の終點驛を下れば前は宇治橋である。**宇治川**は琵琶湖から流れ出る勢多(瀬田川)の下流で、終には淀川となる。宇治橋は今から一千二百年程も前に始めて架けられ、奈良・伊勢方面から京都に來る要路に當るので、古來時々戰場となり、その名を歴史に残してゐる。西から橋柱の三つ目は三の間といひ、特に掛出を作り、こゝから茶の湯の水を汲

平等院

交通
1 名線宇治驛下車
2 京阪電車宇治驛宇治下車

鳳凰堂

拜觀料 二十錢
拜觀所要時間 約三十分

み取るやうにしてある。これは豊臣秀吉から始まったといふ。橋を渡つて左に折れ東南に二〇〇米程行けば**平等院**の境内に入る。本寺は今から約九百年前に宇治の關白藤原頼通の建てた天台宗の寺で、今は天台・淨土の二宗を兼ねてゐる。扇の芝は源頼政が平家と戦つて敗れこゝに軍扇を敷いてその上で自害したといひ傳へる所。その南の觀音堂はもとの釣殿で十一面觀音像を安置してある。その南の阿字池に臨んで**鳳凰堂**がある。これは藤原時代の寢殿建築を佛寺にうつしたもので、中堂には大佛師定朝の傑作の阿彌陀如來の國寶像を安置し、その天蓋・須彌壇と共に精巧を極めてゐる。小壁の長押には五十二體の飛天の雲中供養の相をあらはし、扉には宅間爲成の畫・源俊房の書から成る九品淨土の相をあらはし、當代一流の建築書畫工藝の粹をあつめ、世界に比類なき美術の結晶である。中堂から左右に翼廊・後方に尾廊を出し、建築の全體を以て鳳凰の飛ぶ形となつてゐるが、棟の兩端に一對の銅製鳳凰を置き、風に隨うて舞ふしかけとなつてゐた。池の南にある鐘樓の鐘は前に記した高雄山神護寺及び大津三井寺のそれと合せて日本三名鐘の一に數へられ、特に本寺の鐘は形のよいくことで鳴り響いてゐる。堂後には天台宗の最勝院と淨土宗の淨土院があつて本寺を管理してゐる。

今から七百餘年前に源義仲を源義經が攻める時、この宇治川を挟んで合戦し、義經の部下の佐々木四郎高綱と梶原源太景季が、渡河の先陣争をした物語は、世人のよく知ることであるが、その馬を河に入れたといふ橋の小鳥ヶ崎といふ地點は明かでない。昭和六年にその記念碑を宇治橋の上流の島に建てた。

その島の上流に在る浮島には、今から六百五十年ばかり前に、興正菩薩教といふ大徳が殺生禁斷の趣意を以て造つたといふ**十三重の石塔**が、近年修理を加へて立派に建てられてある。この塔を建てて宇治の綱代木で魚を捕ることを止めさせたのである。

宇治神社

四〇、石清水八幡宮

平等院の川向ひの**宇治神社**には、仁徳天皇の御弟の菟道稚郎子(うさのみちのわかいら)がまつられ、本殿は國寶である。天下の奇祭**懸祭**で有名な**縣神社**が平等院の西隣にある。

石清水八幡宮

A 縣路
1 市電又は市バス河原町三條下車
2 京阪電車八幡下車
B コバス
1 市電又は市バス七條大宮下車
2 京阪バス八幡下車
男山ケーブルの便あり

京阪電車八幡驛に近い男山の頂には官幣大社**石清水八幡宮**があつて、應神天皇と神功皇后と比咩大神の三座をまつつてある。今から約一千年前に僧行教が豊前の宇佐の八幡宮からお迎へしてまつたのが起り、歴代の天皇は篤くこれを尊崇され、武家の世になると武勇の守護神即ち軍神との信仰ができて、源氏ではこれを氏神と敬ふに至り、賀茂の祭に對し本社のそれを南の祭といつて盛大を極めたものである。

石造の一・二・三の鳥居を過ぎ、男山の峰に登れば(この間本殿まで男山ケーブルあり)左右に社務所・神厨・書院・神廐・神輿舎などを見て南門に入る。社殿は八幡造とて、拜殿・幣殿・舞殿・本殿が二棟に南北に連なつて建てられ、その兩棟の軒の接する所に、金の樋をかけ渡してある。廻廊の東には樟の大木があり、楠木正成の手植といひ傳へる。本社の東門を出て急坂を下ると、攝社**石清水社**(天御中主神をまつる)の傍に、岩間から湧出する泉がある。これが石清水の名の起つた根元である。

京都の史蹟名勝天然紀念物

京都の包蔵する名所舊蹟のうち、史蹟名勝天然紀念物保存法に依り、保存指定を受けてゐるものは、現都市部に於て五十箇所、近郊を併せて五十五箇所に達してゐる。

今茲にこれら史蹟名勝天然紀念物の略説をなし、大方の參考に供することとする。

中央部並に東部

1 明治天皇行幸所本願寺 (史蹟)

史蹟及名勝

2 本願寺大書院庭園

〔下京區本願寺門前町
(市電)市バス「七條堀川」又
八市電「西洞院正面」下車〕

明治天皇は、明治十年二月十六日、奈良・京都を御巡幸の際、本寺に行幸遊ばされた。

大書院東にある此の庭園は、枯山水で、古來虎溪庭又は對面所の庭と呼ばれてゐる。巨石を並立して飛瀑を象り、白砂を敷いて水面に擬し、大小種々な布石の間に蘇鐵を巧に配植して、建築と庭園との調和の妙を盡した趣は、桃山時代造園術の特色をよく發揮したものであるが、作者は朝霧志摩之助と傳へられてゐる。(三五頁西本願寺の項参照)

3 明治天皇御小休所枳殼邸 (史蹟)

史蹟及名勝

4 涉成園

〔下京區東玉水町・打越町
(市電)市バス「河原町正面」
又「七條間ノ町」下車〕

涉成園は、もと河原左大臣源融の別業であつた河

原院の遺跡といひ傳へ、徳川家光の寄進によつて大谷派本願寺の別邸となつた。周圍に枳殼を植ゑるところから枳殼邸の名が起つたといふ。

明治天皇は、明治元年三月二十一日、大阪行幸の御小休になられたのを初めとし、同年閏四月八日、同五年六月四日及び同十三年七月十四日の四度に互つて御駐蹕遊ばされ、大正天皇も東宮の御當時行啓あらせられた。

源融の築造當初の庭園は奥州鹽竈の景を寫して營まれたといふ。のち石川丈山の改作に際し、印月池と呼ぶ大池を中心に十三景を配し、その間に梅・楓・藤を植栽して大いにその景觀を改めた。今もよく舊態を保ち幽邃の境をなしてゐる。

5 明治天皇妙法院行在所 (史蹟)

〔東山區妙法院前町
(市電)市バス「東山七條」下車〕

明治天皇は、慶應四年八月二十九日、東京より京都還幸の際、當院で御小休遊ばされ、又明治十三年、山梨・三重・京都行幸の砌、七月十六日こゝに御駐蹕御賽食を召させられたことがあり、玉座の間が現存してゐる。庭園は御座の間庭園及び積翠園の二園よりなりその意匠は共に小堀遠州の流を汲むものといふ。(九頁妙法院の項参照)

天然記念物

6 新熊野神社の樟

〔東山區新熊野ノ森町
(市電)今熊野「下車」〕

新熊野神社は永暦元年十月、後白河上皇の敕旨により、當時の院の御所法住寺殿に熊野本宮を勧請あらせられた社である。上皇は深く熊野大神を崇敬し給ひ、熊野御幸も數度に及んだが、此の社への御參籠は百五十餘度に及んだといふ。爾來歴代皇室の御尊崇篤く、社域の宏壯、社殿の莊嚴洛東の偉觀であつたが、應仁の大亂後、一時社運が衰へた。現在の社殿は、後西天皇の御代に再建されたものである。

樟は社務所の前庭の玉垣の内にあり、高さ六十二尺周圍二十尺に及ぶ老樹で、當社創建の際熊野から移植したものと云ふ。

史蹟及名勝

7 高臺寺庭園

〔東山區下河原町
(市電)市バス「安井北門道」
下車〕

この庭園は、小堀遠州の作と傳へられ、世に鶴龜の庭ともいふ。菟池に架した廊橋によつて、偃月・臥龍の二池に區切られ、臥龍池は稍荒れた觀があるが、偃月池は置石配橋に妙を得て、幽邃清雅の趣に富んでゐる。(二三頁高臺寺の項参照)

名勝

8 圓山公園

〔東山區圓山町・嵯峨町・嵯峨町南側
(市電)市バス「嵐山石段下」
下車〕

(二四頁圓山公園の項参照)

9 南禪院庭園

〔左京區南禪寺町
(市電)南禪寺前「下車」〕

この庭園は京都に残る唯一の鎌倉時代築造のものであり、補作されて稍その景觀を變へたが、主景は、山上皇御在世の當時のまゝといはれ、境内の南・西を限る獨秀峰と羊角嶺の麓に曹源池を穿ち、小島を築き池畔に景石を配して、頗る閑寂な趣に富んでゐる。(二八頁南禪寺の項参照)

史蹟

10 高瀬川一之船入

〔中京區河原町二條下ル東入一之船入町
(市電)市バス「河原町二條」
下車〕

慶長十五年豊臣秀頼が父秀吉の遺志を繼いで大佛殿方廣寺を再建するに際し、諸國から大巨石を伏見に取り寄せたが、これが市内搬入に非常な困難を感じた。因つて角倉了以は奉行片桐且元の許可を得て、二條樋口から賀茂川の水を引入れ、木屋町の西沿ひに伏見まで運河を掘り、容易く石木を運ぶことに成功した。翌年更に徳川幕府に請うて高瀬舟を通じ、貨客の運輸に

充てたのが高瀬川の起りである。爾後高瀬川は江戸時代を通じて盛に利用せられたもので、二條・五條間に設けられた七個の船入には高瀬船の出入繁しく、川筋に間屋が櫛比して商況股盛を極めてゐた。

それも明治以後は次第に衰へ、船入も此處を除いて悉く埋立てられるに及び、此の船入も昔日と著しくその形を變へるに至つた。

11 明治天皇行幸所木戸邸(史蹟)

中京區土手町竹屋町東
入末九町市バス河原町
竹屋町下車東

木戸孝允は長州藩士で、通稱を準一郎、號を松菊といひ、幕末國事に奔走する頃は桂小五郎といつてゐた。明治十年二月西南の役が勃發した際、孝允は聖駕に供奉して入洛したが、不幸病を得るに至つた。明治天皇は深く御軫念あらせられ、五月十九日木戸邸に行幸遊ばされ、優渥なる勅語を賜はつたが、天命如何ともし難く五月二十六日、齡四十四を以て薨じた。

よつて同二十八日、明治天皇は諒詞を賜はり、六月四日、遺骸を洛東靈山に葬つた。

行幸遊ばされた建物は、その後稍位置を變へたが、

能く舊態を存して維新の功臣木戸孝允終焉の様を髣髴たらしめる。

12 頼山陽書齋(山紫水明處)

上京區東三本木南町
市バス河原町九
太町下車東入北

頼山陽は安藝廣島の人で、三十二歳の時京都に上り塾を開いて漢學を講じたが、四十五歳の時此の地に家を建て水西莊と名付けた。文政十一年四十九歳の春、新に書齋を隣地に營み山紫水明處といひ、有名な日本政記の著もここでなされた。山陽は天保三年九月、五十三歳を一期として歿したが、日本政記はその臨終に至るまで筆をとつて稿を全うした。昭和六年九月その百年祭を行ふに際り、畏き邊から特旨を以て従三位に追陞せられた。

此の山紫水明處は四疊半の書室と二疊の侍室とを有する葦葺平家建てで、極めて狭小であるが、西に山陽意匠の庭を控へ、東に水明の賀茂川を臨み、比叡の雄姿を仰いで風光の美なること、その名に背かない。

13 伊藤仁齋宅(古義堂)趾並書庫

上京區東堀川通出水下ル
市バス堀川下立賣下車北

爾來時代の降ると共に舊規を失ひ、今は纔に方一町の區域に往時の佛を止めるばかりである。池の南の中間には善女龍王を祀る堂がある。

15 聖護院舊假皇居

左京區聖護院中町
市バス錦林松前下車北

天台宗寺門派の大本寺で、白河上皇熊野御幸の際増譽大僧正が先達を承り、その功に依り熊野三山の檢校職となつて修驗道の統轄を命ぜられ、一寺を下賜されたのが本院の起りである。現在の建物は延寶年間鳥丸通今出川の地からこゝに移された際、造營されたものである。天明八年正月三十日内裏炎上の際、光格天皇はこゝに御避難あらせられ、寛政二年十一月二十二日まで假皇居となし給うた。又安政元年四月六日内裏炎上の際にも、孝明天皇は皇子祐宮(明治天皇)と共に難を避け給ひ、同月十五日まで御駐蹕あらせられたところである。

16 慈照寺(銀閣寺)舊境内

左京區銀閣寺町
市バス銀閣寺道下車東

因に慈照寺舊境内として指定せられた區域は、近年發見せられた境外遺跡をも含めたものである。

伊藤仁齋は、名を維楨、通稱を源佐といひ、仁齋はその號である。初め宋學に志したが、後悟るところあつて古學を唱導し堀川の自宅に塾を開いた。仁齋は頗る恭儉・謙讓であつたので、人に屈することを知らなかつた。萩生徂徠すら、仁齋のみは尊敬してゐたといふ。仁齋の子東涯も亦よく父の意圖を紹述したので、京都の古學は鬱然として興り、その門人も千人を超えらるに至つた。

創建當初の古義堂は延寶元年の大火で焼失し、現在の建物は明治二十三年の建造であるが、書庫のみは昔時のものであり、中には仁齋・東涯の書入本が多く藏されてゐる。

14 神 泉 苑

中京區神泉苑町通御池東入
市バス堀川御池下車西

平安京造營に際り、大内裏の東南に接して營まれた禁苑である。昔はその面積も東西二町、南北四町の廣きに互り、苑内に大池を穿ち、林泉の美を盡くして御遊の所となし給ひ、群臣と詩賦宴遊の清興を行はせられた。

弘法大師はこゝで守敏僧都と祈雨の法験を競ひ、清和天皇は貞觀五年御靈會を修せられた。又小野小町が和歌を詠じて雨を降らしたといふのも此の地である。

17 史蹟及名勝 銀閣寺(慈照寺)庭園

左京區銀閣寺
(市電「銀閣寺前」下車東)

文明十五年、足利義政が東求堂を造営するに當り相阿彌に命じて作らしめたもので、石組を主とした廻遊式の庭園である。

東求堂と銀閣との間に錦鏡池を穿ち、鳥を築き、石橋を架し、多数の景石を配して善美の限りを盡したものである。而して近年發掘せられたお茶の井の石組が、松尾の西芳寺の清泉龍瀧水の手法に酷似してゐるところから、作庭に際り相阿彌が西芳寺を範としたことが、如實に見られることゝなつた。

錦鏡池の邊を畫の庭とし、月待山に昇る月の光を、白砂を盛り上げた向月臺や銀砂灘に映じて夜庭の美觀を添へたことは、相阿彌獨特の意匠で、よく東山時代藝術の粹を表したものといはれる。(二六頁銀閣の項參照)



18 史蹟 仙堂

左京區一乗寺小谷町
(市電「一乗寺」下車東)

19 史蹟 石川丈山墓

左京區一乗寺松原町
(市電「一乗寺」下車東)

詩仙堂は江戸時代初期の詩人石川丈山の隠棲した跡で、丈山が本邦三十六歌仙に擬して狩野探幽筆の支那三十六詩仙像を居堂の四壁に掲げたところから詩仙堂と名づけられた。

丈山は三河の人で、年少夙に徳川家康に仕へ、大阪夏の陣に先陣の功を争つて拔擢したので家康の怒を買ひ、致仕して剃髮し、京都に上り來つて悠々、自適の生活を送つた。

寛文十三年五月二十三日齡九十を以て歿し、その遺骸を、丈山が生前墓所と定めた詩仙堂東南の舞樂寺山中に葬つた。墓碑は高さ八尺餘の自然石で、丈山の友人野間三竹の撰文を陰刻してある。

20 史蹟 延暦寺境内

左京區修學院尺取ヶ谷四明ヶ池
愛宕郡八幡村大黒町、八町
(市電「八幡」下車
下車「四明ヶ池」)

21 天然記念物 比叡山鳥類蕃殖地

(四〇頁比叡山延暦寺の項參照)

延暦寺境内は聖地として永く殺生を禁ぜられ、老杉古檜が鬱蒼と繁茂してゐるので、小禽類の棲息蕃殖す

るに適し、三光鳥・大瑠璃等その數十種を超えるといふ。中でも三光鳥は靈鳥として有名である。

22 史蹟 岩倉具視幽棲舊宅

愛宕郡岩倉村前町
(市電「岩倉」下車北)

文久二年、岩倉具視が朝議を蒙り、出仕を停められたからのち慶應三年勅免せられるまで謹慎盤居してゐたところである。

具視は盤居の身ながらも、三條實美を始め西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允等の志士と謀を通じ、維新の大業を翼賛し奉つた。

此の舊宅は葦葺平家建二棟で、一棟は具視が隠棲に際り買ひ受け、他は幽棲中に増築したものである。

具視の薨後その遺髪を此の地に埋め、明治十八年石碑を建設した。碑面には圖書頭井上毅の撰文を刻してある。

23 史蹟 栗栖野瓦窯跡

愛宕郡岩倉村枝
(市電「岩倉」下車南)

平安京發都に際り、諸官衙・社寺等の用瓦を製した栗栖野瓦窯の遺址である。

現在窯跡のある幡枝は昔の栗栖野郷の一部に當り、遺址は部落内の各所に散在するが、最も舊規を存して

ゐるのは城山と呼ぶ丘陵に残存するものである。その構造は平築に屬し、平面約七尺に五尺の矩形をなす瓦床と、炕道並に火床とよりなり、往時の官窯の構造や製作工程を窺知し得るものである。

24 天然記念物 深泥池水生植物群落

上京區上賀茂深泥池町
(北大路橋西詰より鞍馬バ
ス深泥池下車)

深泥池は泥濘池又は御菩薩池とも書き、周回約十八町の沼であり、最深部に於ても六尺内外に過ぎないが、池底は泥土の堆積が厚いのでこの名が起つた。

此の池は昔から有名で、淳和天皇が親しく禽獵せられたこともあり、又彌勒菩薩が池上に現はれたといふ傳説もある。俗に御菩薩池と謂はれる所以である。

池中には、美味を以て知られる菊菜其の他學術研究の好資料となる水生植物が群をなして繁茂してゐる。特殊な景觀をなす池邊の浮鳥は、池底の根莖層が暑熱の作用で浮び上つたものといはれ、その成因を珍重

17 史蹟及名勝 銀閣寺(慈照寺)庭園

左京區銀閣寺
(市電「銀閣寺前」下車東)

文明十五年、足利義政が東求堂を造営するに當り相阿彌に命じて作らしめたもので、石組を主とした迴遊式の庭園である。

東求堂と銀閣との間に錦鏡池を穿ち、島を築き、石橋を架し、多數の景石を配して蕪美の限りを盡したものである。而して近年發掘せられたお茶の井の石組が、松尾の西芳寺の清泉龍淵水の手法に酷似してゐるところから、作庭に際り相阿彌が西芳寺を範としたことが、如實に見られることゝなつた。

錦鏡池の邊を晝の庭とし、月待山に昇る月の光を、白砂を盛り上げた向月臺や銀砂灘に映じて夜庭の美觀を添へたことは、相阿彌獨特の意匠で、よく東山時代藝術の粹を表したものといはれる。(二六頁銀閣の項参照)



18 史蹟 仙堂

左京區一乗寺小谷町
(叡山電鐵「一乗寺」下車東)

19 史蹟 石川丈山墓

左京區一乗寺松原町
(叡山電鐵「一乗寺」下車東)

詩仙堂は江戸時代初期の詩人石川丈山の隱棲した跡で、丈山が本邦三十六歌仙に擬して狩野探幽筆の支那三十六詩仙像を居堂の四壁に掲げたところから詩仙堂と名づけられた。

丈山は三河の人で、年少夙に徳川家康に仕へ、大阪夏の陣に先陣の功を争つて拔擢したので家康の怒を買ひ、致仕して剃髮し、京都に上り來つて悠々、自適の生活を送つた。

寛文十三年五月二十三日齡九十を以て歿し、その遺骸を、丈山が生前墓所と定めた詩仙堂東南の舞樂寺山中に葬つた。墓碑は高さ八尺餘の自然石で、丈山の友人野間三竹の撰文を陰刻してある。

20 史蹟 延暦寺境内

天然記念物

左京區修學院尺土ヶ谷四町
ケ谷八幡村大黒町・八町
(叡山電鐵「八幡」下車東)
(叡山ケーブル「四明」下車)

延暦寺境内は聖地として永く殺生を禁ぜられ、老杉古檜が鬱蒼と繁茂してゐるので、小禽類の棲息蕃殖す

21 天然記念物 比叡山鳥類蕃殖地

(四〇頁比叡山延暦寺の項参照)

るに適し、三光島・大瑠璃等その數六十種を超えるといふ。中でも三光島は靈鳥として有名である。

22 史蹟 岩倉具視幽棲舊宅

愛宕區岩倉村前町
(鞍馬電鐵「岩倉」下車北)

文久二年、岩倉具視が朝議を蒙り、出仕を停められたからのち慶應三年勅免せられるまで謹慎蟄居してゐたところである。

具視は蟄居の身ながらも、三條實美を始め西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允等の志士と謀を通じ、維新の大業を翼賛し奉つた。

此の舊宅は蕨葺平家建二棟で、一棟は具視が隱棲に際り買ひ受け、他は幽棲中に増築したものである。具視の薨後その遺髪を此の地に埋め、明治十八年石碑を建設した。碑面には圖書頭井上毅の撰文を刻してある。

23 史蹟 栗栖野瓦窯址

愛宕區岩倉村橋本
(鞍馬電鐵「木野」下車南)

平安京京都に際り、諸官衙・社寺等の用瓦を製した栗栖野瓦窯の遺址である。

現在窯址のある幡枝は昔の栗栖野郷の一部に當り、遺址は部落内の各所に散在するが、最も舊規を存して

ゐるのは城山と呼ぶ丘陵に残存するものである。その構造は平窯に屬し、平面約七尺に五尺の矩形をなす瓦床と、炕道並に火床とよりなり、往時の官窯の構造や製作工程を窺知し得るものである。

24 天然記念物 深泥池水生植物群落

上京區上賀茂深泥池町
(北大路橋西詰より鞍馬バス「深泥池」下車)

深泥池は泥濘池又は御菩薩池とも書き、周回約十八町の沼であり、最深部に於ても六尺内外に過ぎないが、池底は泥土の堆積が厚いのでこの名が起つた。

此の池は昔から有名で、淳和天皇が親しく禽獵せられたこともあり、又彌勒菩薩が池上に現はれたといふ傳説もある。俗に御菩薩池と謂はれる所以である。

池中には、美味を以て知られる萹葉其の他學術研究の好資料となる水生植物が群をなして繁茂してゐる。特殊な景觀をなす池邊の浮鳥は、池底の根莖層が暑熱の作用で浮び上つたものといはれ、その成因を珍重

がられる。

天然記念物

25 大田の澤のかきつばた群落

上京區 上賀茂
(北大路橋西詰より数馬、
大田神社前下車)

上賀茂神社(賀茂別雷神社)の攝社大田神社の境内小池にあり、藤原俊成が「神山や大田の澤のかきつばたふかきたのみは色に見ゆらむ」と詠じたもので、紫系一色の野生である。俊成の和歌に見えてから八百年後まで古い自然の姿を残してゐるものと見られてゐる。

26 御土居

上京區 賀茂玄以町・大宮上岸町・大宮土居町・大宮西土居町・豊ヶ崎舊土居町・平野島居前町・北之邊町
中京區 西ノ京中合町

天正十九年豊臣秀吉が、京都の市區整理を行つた時洛の内外を区分して築造した土境である。昔は東寺四塚から西院・北野を経て鷹ヶ峰に至り、東に折れて賀茂川傳ひに四塚へと、京都を圍繞してゐたもので、その延長は約六里に及んだ。概ね、土壘の外側に濠を穿ち、要所には番舎を設けて帝都の警固に備へたもので

あるが、その後次第に破壊せられて、今は纔に西賀茂・鷹ヶ峰・北野其の他に残存するのみである。

史蹟及名勝

27 大徳寺方丈庭園

上京區 紫野大徳寺町
(市電大徳寺前市バス紫野門前町下車)

この庭園は寛永十三年方丈再建の際築造されたものといはれ、東・南の二庭に分れ、孰れも白砂を敷き、南庭はその東南隅に常緑樹を植ゑ、二個の巨石を擗て、濠を象つてゐる。東庭は小石を七五三に配し、間に鷹躑を植ゑて副景となし、二重籬で圍んでゐる。此の生垣越に比叡の秀峰を借景して簡勁優雅の中に豪放の氣宇をしのばせてゐる。(三〇頁大徳寺の項参照)

史蹟及名勝

28 大仙院書院庭園

上京區 紫野大徳寺町
(市電大徳寺前市バス紫野門前町下車)

大仙院は、今から約四百餘年前、六角近江守政頼が、その子古岳和尚を開山として建立した大徳寺の塔頭である。國寶の方丈には本尊釋迦如來を安置し、その襖繪は狩野元信の描くところである。古岳和尚は大徳寺七十六世の住持で、後奈良天皇から正法大聖國師の號を賜うた。庭園は枯山水の石庭で、相阿彌の作と傳へる。

東北隅の土塀近く二個の巨石を擗て、背景に椿を植ゑて濠を象り、大小の景石を以て橋を架け、船を泛べ、

溪水が瀧口から奔流する様を巧に表現してゐる。

古雅な方丈の建築美と調和して氣品頗る高く、枯山水式庭園中天下無雙のものといはれてゐる。(三〇頁大徳寺の項参照)

史蹟及名勝

29 眞珠庵庭園

上京區 紫野大徳寺町
(市電大徳寺前市バス紫野門前町下車)

眞珠庵は、後花園天皇の御代、泉州堺の宗臨が創建したといはれ、大徳寺塔頭の隨一である。初めは瞎彌軒と號して、奇行を以て知られた一休禪師の庵室であつたが、のち焼失して延徳年間に再建されてから今の名に改まつた。當庵には一休禪師の墨蹟や肖像等を多く藏し、方丈は寛永十五年の建築で、國寶に指定せられてゐる。

庭園は、一休禪師に參禪した村田珠光の作と傳へられ、方丈及び書院に配して造られてゐる。方丈の庭園は一名一休庵室の庭とも呼ばれ、南は生垣や刈込を以て景觀を作り、東は全庭苔に覆はれ、小石を七五三に配してある。書院の小庭には珠光遺愛の手水鉢や燈籠・歩石を布置して茶庭の觀を表してゐる。(三〇頁大徳寺の項参照)

史蹟及名勝

30 孤篋庵庭園

上京區 紫野大徳寺町
(市電船山公園前下車北)

慶長十七年、小堀遠江守政一が大徳寺塔頭龍光院内に小庵を結び、その子江月和尚を開基として創建したもので、寛永年中今の地に移つた。眞珠庵、大仙院と共に大徳寺の塔頭であり、現在の建物は寛政五年炎上後の再建で、方丈・茶室・書院共に國寶である。小堀政一は禁裏並に幕府の作事奉行・伏見奉行等を歴任し作庭・茶道・書畫に巧であつたので、その流派を遠州流と呼ぶ。

此の庭園も亦遠州の意匠といはれ、方丈前庭と忘茶(茶室)・書院前庭及び茶室四方面の庭からなつてゐる。方丈前庭には象徴的な二重の籬を施し、忘茶・書院の前庭は近江八景を表現したといふ枯山水の平庭である。奥の茶室四方面の庭は、その名の通り四方よりの觀賞に技法の妙を凝らした茶庭である。(三〇頁大徳寺の項参照)

史蹟

31 常照寺九重櫻

北條郡 山田村井戸
(京東線より省營バス山田御陵前下車)

臨濟禪宗天龍寺の末寺で、光嚴院の御開基になる。戦國の際に至り一時廢頽したが後再興されたもので、

光嚴院の御木像、御遺物、御宸翰其他の什寶類を多く蔵する。

庭前の九重樓は、光嚴院御遺愛の古木と傳へられる。祇園の櫻と同じく白枝垂で、大ききも殆ど同じくあり、枝張りも美事で花輪は非常に小さい。



32 金閣寺(鹿苑寺)庭園

史蹟及名勝
上京區衣笠金閣寺町
〔市電〕金閣寺道「下車、北野よりバスの便あり」

この庭園は義満の好尚に成つたもので、西園寺家所領當時の鏡湖池に金閣を泛ばしめ、出龜・入龜の二島を築き、諸大名の寄進にかゝる景石を配してゐる。其の他夕佳亭を始め、室町時代文化の豪宕雄壯さを髣髴せしめる名残が多い。方丈裏庭には名木「陸舟松」がある。(三二頁金閣寺の項参照)

33 龍安寺方丈庭園

史蹟及名勝
右京區龍安寺細腰ノ下町
〔嵐山電車〕龍安寺道「下車北西」

もと徳大寺左大臣實能の山莊のあつたところで、細

川勝元が此の地を乞ひ受けて別莊を營み、其の歿後遺囑して妙心寺の義天和尙を開山とし、妙心寺派の禪刹と改めた。往時は子院二十餘を數へ、寺運頗る盛であつた。

庭園は、東西約十七間、南北約八間の矩形をなし、一面に白砂を敷いて海洋に擬し、東から七五三の十五石を配して鳥嶼を表象してゐる。他に一木一草もなく頗る含蓄ある風韻を致し、俗に「虎の子渡し」と呼ばれてゐる。相阿彌の意匠になるものといひ、枯山水名苑の隨一である。

34 妙心寺庭園

史蹟及名勝
右京區花園妙心寺町
〔市電〕花園驛「又は嵐山電車」
〔妙心寺〕「下車北野又は千本丸太町よりバスの便あり」

伽藍の東庭には、雪江和尙の植ゑた老松があり、又、三門と佛殿との間には雪江門下の龍泉・東海・靈雲・聖澤の四派を表した四派の松がある。大方丈の前庭は半ば苔に蔽はれた砂庭に老松を配し、塀を隔ててその東に小方丈の庭がある。(四五頁妙心寺の項参照)

35 玉鳳院庭園

史蹟及名勝
右京區花園妙心寺町
〔市電〕花園驛「又は嵐山電車」
〔妙心寺〕「下車北野又は千本丸太町よりバスの便あり」

花園天皇が關山和尙を請じて妙心寺を創建遊ばされ

た時、親ら御參禪のため、傍に一院を建立せられ、玉鳳院と名づけられた。されば玉鳳禪宮又は麟徳殿とも號し、花園天皇の御法體尊像や爪字の觀音を奉安する。正平十五年、關山和尙が入寂するや、その遺骨をこの院の東隣に葬り、開山堂微笑庵を建立した。今も妙心寺の塔頭院主は毎月輪香で、天皇並に開山に奉仕する習はしである。

庭園は微笑庵の東側庭園と、北隣の祥雲院前庭の二つに分れる。東側庭園は長方形の丘上に景石を配した江戸時代の作で、祥雲院前庭はその豪華奔放な技法から桃山時代の作といはれる。(四五頁妙心寺の項参照)

36 東海庵書院庭園

史蹟及名勝
右京區花園妙心寺町
〔市電〕花園驛「又は嵐山電車」
〔妙心寺〕「下車北野又は千本丸太町よりバスの便あり」

東海庵は文明十六年に妙心寺中興の祖雪江和尙が、直弟悟溪和尙に寺地を興へて建立せしめた塔頭で、妙心寺四派本庵の一である。

悟溪和尙は尾張の人で、雪江和尙の印可を受けてから、美濃に下り瑞龍寺を建て教義を東海道地方に弘通した爲、その教義を東海派といふ。

書院庭園は文化十一年の築造と傳へ、西方前庭及南庭の二つに分たれる。

西方前庭は平庭で、景石を布置して池を表はし、燈籠・手水鉢を備へるが、南庭は枯山水で小石を自由に配置し、共に清雅の趣に富んでゐる。(四五頁妙心寺の項参照)

37 靈雲院庭園

史蹟及名勝
右京區花園妙心寺町
〔市電〕花園驛「又は嵐山電車」
〔妙心寺〕「下車北野又は千本丸太町よりバスの便あり」

靈雲院は、今から約四百年前、藥師寺備後守の室清範尼の求めにより、大休國師がその師特芳和尙を開山として創建した妙心寺本庵の一である。特芳和尙は雪江和尙の高弟で、靈雲派の開祖である。大休國師は和尙の遺鉢を繼いで識徳一世に高く、後奈良天皇は深く國師に歸依せられて、屢こゝに行幸遊ばされた。されば今もこゝには方丈の外に御幸の間と稱する國寶の書院があり、天皇の參禪せられた跡といふ。

庭園は是庵の作と傳へられ、方丈と御幸の間の中庭として造られたもので、極めて狭小な地域に楕石を繪畫的に配置し、頗る優雅な趣を具へてゐる。(四五頁妙心寺の項参照)

38 退藏院庭園

史蹟及名勝
右京區花園妙心寺町
〔市電〕花園驛「又は嵐山電車」
〔妙心寺〕「下車北野又は千本丸太町よりバスの便あり」

退蔵院は、今から約五百餘年前、波多野出雲守重通が、妙心寺の三世無因禪師を開山として創建した塔頭である。のち龜年和尙が住するに及んで之を中興し、寺運愈盛となつた。

方丈の西にある庭園は枯山水で狩野古法眼元信の作といはれ、池泉を穿ち、水分石・三尊石・拜石等の景石を巧に池邊に配し、池中に鳥を築いて、頗る繪畫的に意匠を凝らした小庭で、閑雅揃すべきものがある。
〔四五百妙心寺の項参照〕

39 桂春院庭園

桂春院は、慶長三年美濃の豪族石河壹岐守貞政が、桂南和尙を請じて創建した妙心寺の塔頭で東海派に屬してゐる。

庭園は方丈の南、東及び書院前庭の三庭に分たれる。方丈南庭は北側の崖を踞蹠の大刈込で蔽ひ、その下に東から椿・紅葉等を植ゑ、庭石を七五三風に組んで、地勢の變化を巧に利用し、飛石傳ひに方丈東庭に續けてある。書院前庭は同じく低地を利用した飛石本位のもので、燈籠を配置し、茶庭の觀を具へてゐる。
〔四五百妙心寺の項参照〕

40 仁和寺御所趾

史蹟及名勝

右京區御所大内
〔山電車又はバス「御所」下車〕

41 御室(櫻)

史蹟及名勝

境内には櫻樹極めて多く、世に御室の櫻といひ、花時には境内は花見客で雜鬧する。現在保存法の適用を受けてゐる櫻は、中門を入つて左の觀音堂前に植栽せられた約二百三十株である。樹態は矮生で、一見蹠蹠の様な觀を呈し、その品種も有明・車返し・鬱金・普賢象等頗る多く、優婉の眼を盡くしてゐる。
〔四四百仁和寺の項参照〕

42 大澤池(附名古屋瀧趾)

史蹟及名勝

この池はもと、嵯峨天皇の離宮が設けられたところで、池は支那の洞庭湖に似てゐるところから、庭湖ともいふ。池中には二島あつて、大なるを天神島と稱して菅公を祀り、小なるを菊ヶ島といつて、嵯峨天皇が菊花を植ゑられたと傳へてゐる。島の間に見える石は庭湖石といつて巨勢金岡が配置したものといひ、昔から珍重せられてゐる。
大納言藤原公任の

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど

名こそ流れてなほ聞えけれ
の歌で有名な名古屋瀧はこの池の北にあつたもので、今に其の趾が残つてゐる。池岸には櫻樹多く、花の名所として知られ、秋はまた月を賞するによい。

43 大覺寺御所趾

史蹟

右京區嵯峨大澤町
〔愛宕電車「龍淵堂」下車東、北〕

44 天龍寺庭園

史蹟及名勝

右京區嵯峨天龍寺本ノ馬場町
〔省線「嵯峨」又は山電車「嵐山」下車〕

本寺の開山夢窓國師は疎石と稱し、作庭の妙を極め各所に苑池を築いたが、中にも天龍寺庭園は尤も意を注いだものであつた。然し後世數度の火災に遭ひ、國師の意匠に成る十境も多く舊觀を失ふに至つたが、方丈西の庭園のみは、最もよく舊規を保ち、中心に曹源池を穿ち、龜山の麓に龜尾瀧を懸け、池中に辨天鳥を築いて、昔時の佛を止め、閑寂幽玄の趣に富む池泉である。
〔四九頁天龍寺の項参照〕

45 嵐山

史蹟及名勝

右京區嵯峨
〔省線「嵯峨」或は山電車「嵐山」下車〕

嵐山は古來その山容水態の美を以て天下に聞え、附近には天龍寺を始め、臨川寺・法輪寺・小督塚・龜山公園等多くの名所舊蹟を蔵して、春の櫻・初夏の新緑・秋の紅葉・冬の雪景と四時觀る人の目を悦ばしめる。

初めは紅葉の美を以て知られ、桓武天皇の行幸以來、秋には列聖の臨幸相繼ぎこの勝景を賞し給ひ、三船の御遊も屢行はれたが、龜山天皇が吉野の櫻を移植せられてから、春の眺めも、一入美しくなつた。
毎年五月十四日、大堰の清流に龍頭首の三船を泛べて舟遊祭を舉行し、往古の雅びを今に再現せしめ

46 西芳寺庭園

史蹟及名勝

右京區嵯峨神ヶ谷町
〔新山電車「上桂」下車又は山電車「西芳寺前」下車〕

慶長年間角倉了以は大堰川の岩石を開鑿して遠く丹波保津村から舟筏を通した。今も山中の大悲閣には了以の像が安置してある。
〔四八頁嵐山の項参照〕

この庭園は本寺の中興夢窓國師の作で、數度の兵燹にその舊態を變へたが、猶上部・下部の二庭に劃せられることは國師の築造當初と異ならない。上部庭園は枯山水で、龍淵水・坐禪石を配し、山上に今はなき縮遠亭、山腹に指東庵を建て、麓に向上關をしつらへ、

下部庭園は中心に心字型の黄金池を穿ち、景石を配して南北の池岸に潭北・湘南の二亭を配してある。國寶の湘南亭は一時岩倉具視が隠棲した跡であり、全庭には綠苔が潮が上にも繁茂してゐるので世人此の寺を呼んで苔寺と言ふ。(五一頁西芳寺の項参照)

47 天皇の杜古墳

右京區御陵塚ノ杜町
(七條大宮より龜岡行バスにて三宮神社前「下車北」)

此の古墳は東向の緩かな傾斜地に、墳の正面を南にし、主軸を南北に置いて築造せられた前方後圓墳である。前後の長さ二百八十尺、後圓部の基底徑百七十尺、東面の高さ二十四尺、前方部は後圓丘より八尺低く、正面の幅は百五尺である。

後圓部の頂上には、俗に 文徳天皇を奉祀するといふ祠があり、文徳天皇の御陵とも傳へられてゐる。祠をめぐつて巨樹繁茂し、森嚴の氣に充ちてゐる。

48 遊 龍 松

天然記念物
乙訓郡大原野村小國
(名鉄「高日町驛」又は新京阪電車「西向日町」下車西)

遊龍松は善峰寺の境内にある。徳川綱吉の母桂昌院が始めて植ゑたものといひ傳へる。主幹は周圍約六尺、高さ僅に三尺内外であるが、横枝の延長は北方約七十一尺、西方約七十七尺にも及ぶ五葉の松で、人工に

より異常の發育を遂げた珍種である。

この寺は天台宗、西國三十三所第二十番の札所である。今から約九百年前、開山源算上人が、この山に草庵を結び、七晝夜の間石上で坐禪したとき、一老翁から佛寺の建立を望まれ、群猪の力を藉つて三尾四谷に寺院五十餘宇を創建したといふ。其の後慈鎮和尚を始め、覺快外四法親王も居住せられて當時西山の宮と稱せられた。本堂の本尊千手觀世音は弘法大師の作といふ。



49 教王護國寺境内

史蹟
下京區九條町
(市電「市バス東寺門前」下車)

本寺の境内には、出土古瓦、礎石の外昔時の遺構を存するものは少いが、豐臣・徳川二家の再建にかゝる國寶建造物が多い。(三六頁東寺の項参照)

50 西 寺 趾

史蹟
下京區唐門町・唐橋川
八坂町
(市電「九條大路唐門町」又は市バス「千本四條」下車西・北)

平安京造營の昔、東寺と共に羅城門の西に建てられ

た官寺の一で、右寺ともいつた。勤操僧正や守敏僧都の高僧が多く住し、守敏僧都は、弘法大師が東寺を賜はつたに對し、西寺を賜はつた。以來朝野の尊崇篤く結構壯麗を極めたが、其の後漸く衰微し、鎌倉時代には尤も甚だしく荒廢するに至り、纔に遺つた塔婆一基も天福年間には焼失し、爾後再建のことなく、今は舊城附近の一字にその名を残すのみである。

指定地域内には西寺金堂趾と傳へる土壇があつて、古瓦の出土する外他に遺構の存するものもないが、昭和八年五月、附近の謙達稻荷神社の北、唐橋門脇町から地下二尺に埋存した礎石が発見せられた。

51 荷田春滿舊宅

史蹟
伏見區深草敷ノ内町
(名鉄「稻荷驛」又は市電「市バス」京阪電車「稻荷」下車)

荷田春滿は今から約二百七十年前の寛文九年正月三日、稻荷神社祠官の家に生れた。早くから和歌に長じ、僧契沖の後を承けて萬葉集の解讀に専念し、國學の基礎を固めた人で、元文元年七月二日齡六十八歳で歿した。その門人賀茂眞淵や本居宣長・平田篤胤と共に國學の四大人といはれる。

春滿の起居した邸宅は、母屋・門・神事舎等がその

まゝ今に残つてゐて、大人在世の當時を髣髴せしめるものがある。東隣の東九神社は、明治十六年の創建になり、大人の靈を祀る府社である。

52 明治天皇御小休所安樂壽院(史蹟)

史蹟
伏見區竹田内畑町
(市電又は奈良電車「城南宮前」下車)

安樂壽院は新義眞言宗智山派に屬し、今から約八百年前、鳥羽上皇が覺行法親王を導師として創建し給うた寺で、鳥羽離宮又は竹田御所と稱せられた地内に當る。上皇の御報信殊に篤く、永治元年此の地で御落飾ありて院政をみそなはせられた。今も此の地には、鳥羽天皇安樂壽院陵及び 近衛天皇安樂壽院南陵がある。

明治天皇は近畿・中國・九州御巡幸の際、明治五年六月四日、當院の本坊書院に御小休遊ばされた。

又鳥羽伏見の戦に際しては官軍の大本營や薩軍の本陣の置かれた史蹟である。

53 平等院庭園

史蹟及名勝
久世郡宇治町
(名鉄「宇治驛」又は京阪電車「宇治」下車)
(五五頁平等院の項参照)

54 史蹟及名勝 醍醐寺三寶院庭園

伏見區醍醐東大路町
三條大橋又は六地藏より
京阪バス「三寶院前」下車

三寶院は醍醐寺十四世勝覺が創建した寺で、もと灌頂院といつた。醍醐寺の一院家であつたが、室町時代の初め、當院の賢俊・滿濟の兩門主が重用せられてから、座主の住院となつた。

庭園は方丈・唐門等と共に、慶長三年豊臣秀吉が竹田梅松軒を庭奉行として築造したものである。秀吉は先づ諸堂宇の整備を待つて同年三月十四日、醍醐の花見の宴を催し、のち自ら設計して造園の工を起したが此の園の完成を見ることなく八月十六日遂に薨じた。

この園は平安時代の寝殿造に倣つた林泉に、鎌倉・室町兩時代庭園の趣を加へ、桃山時代の豪宕清雅な氣韵を表はしたものである。(五三頁醍醐寺の項参照)

天然記念物

55 巨椋池むじなも産地

伏見區向島巨椋池
(奈良電車「小倉」下車)

巨椋池は周圍四里、水深僅に六尺ばかりの沼澤である。昔は廣漠とした大湖であつて、桂・宇治・木津・賀茂の諸川が流入してゐたといふ。その後豊臣秀吉が池の北に放水路を掘鑿し、宇治川と巨椋池とを分けて

からは次第に範圍を狭め、現在では干拓工事のため更に縮小された。

池には水生植物が多く繁茂し、中でも「むじなも」の自生が最も著名で珍重せられてゐる。「むじなも」には、その捕蟲葉に觸れた小昆蟲類を捕へ食する習性があり、分布も極めて少いので、その自生状態を保存するため、干拓に際しても池の一部を永久に保存してその永續を計ることとなつた。

京都關係重要年表

紀元	御代	重	要	事	項
一四一五年	桓武天皇	平安京奠都			
一四一五年	平城天皇	和氣清麻呂・坂上田村麻呂征夷大將軍となる			
一四一五年	嵯峨天皇	延暦寺・鞍馬寺・東寺・清水寺・檀林寺・誓願寺・西明寺創立			
一四一五年	淳和天皇	最澄は天台宗、空海は眞言宗を傳ふ			
一四一五年	仁明天皇	小野篁(學者)・橘逸勢(書家)・百濟河成(畫家)			
一四一五年	文德天皇	勸學院・學館院など興る			
一四一五年	清和天皇	智證大師・慈覺大師			
一四一五年	陽成天皇	藤原氏攝政關白となる			
一四一五年	光孝天皇	平野神社・石清水八幡宮・吉田神社・八坂神社・仁和寺・神護寺・醍醐寺創立			
一四一五年	宇多天皇	都良香・菅原是善・在原業平・僧正遍昭・源融			
一四一五年	醍醐天皇	菅原道眞・紀貫之・三善清行・源經基・小野道風			
一四一五年	朱雀天皇	勸修寺創立			
一四一五年	朱雀天皇	古今和歌集成。平將門亂をなす			

〇〇〇二	でま年〇五九一	でま年〇〇九一	でま年〇	五八一	でま年〇〇八一	でま年〇五七一	でま年〇〇七一	でま年〇五六一
後伏見天皇 後二條天皇	後嵯峨天皇 後深草天皇 龜山天皇 後宇多天皇 伏見天皇	後鳥羽天皇 土御門天皇 順德天皇 仲恭天皇 後堀河天皇 四條天皇	二條天皇 六條天皇 高倉天皇 安德天皇	近衛天皇 後白河天皇	堀河天皇 鳥羽天皇 崇徳天皇	後朱雀天皇 後冷泉天皇 後三條天皇 白河天皇	一條天皇 三條天皇 後一條天皇	村上天皇 冷泉天皇 圓融天皇 花山天皇
天龍寺・大徳寺・妙心寺創立 寧一山・師鍊 <small>シラカ</small>	日蓮宗・時宗起る。東福寺・本願寺・南禪寺創立 藤原信實・土佐吉光(畫家) 文永の役 弘安の役 興正菩薩・藤原道家	臨濟宗・曹洞宗傳はる。眞宗起る 建仁寺・佛光寺・東福寺・梅尾高山寺創立 榮西・道元・法然・親鸞・文覺・明恵・藤原定家(歌人)・運慶・洪慶(佛師)・藤原隆信・住吉慶恩(畫家) 承久の亂 六波羅府起る	土佐光長(畫家) 浄土宗起る。三十三間堂創立 福原に遷都。三條大橋を起す 妙法院・黒谷光明寺・知恩院創立	保元の亂・平治の亂・鹿ヶ谷事件・宇治川の戦 平清盛・平重盛・平宗盛・源義朝・源義平・源頼朝・源頼政・源義仲・藤原俊成(歌人)	融通念佛宗起る 尊勝寺・最勝寺・圓勝寺・得長壽院創立 平正盛・源爲義・大江匡房・平忠盛・鳥羽僧正・西行	鳳凰堂(平等院)・法勝寺創立 源頼義・源義家 延暦寺の僧三井寺を焼く 白河法皇熊野・高野山に御參詣	藤原道長・上東門院・紫式部(文學者)・藤原佐理・藤原行成(書家)・藤原頼通・定朝(佛師)・恵心僧都(僧・畫家) 法成寺・革堂創立 源頼光・源頼信・藤原保昌	六波羅密寺創立 空也・源滿仲・元三大師 北野神社創立

〇〇四二	でま年〇五三二	でま年〇〇三二	でま年〇五二二	でま年〇〇二二	でま年〇五一二	でま年〇〇一二	でま年〇五〇二	でま年
東山天皇	後光明天皇 後西天皇 靈元天皇	明正天皇 後水尾天皇 後陽成天皇	後奈良天皇 正親町天皇 後陽成天皇	後柏原天皇 後奈良天皇	後土御門天皇 後花園天皇	後小松天皇 稱光天皇 後花園天皇	後龜山天皇 長慶天皇 後村上天皇	花園天皇 後醍醐天皇
土佐光起・尾形光琳・依屋宗達(以上畫家)・松尾芭蕉・大石良雄・貝原益軒・細井廣澤・荷田春滿・伊藤東涯・石田梅巖	萬福寺・法然院創立 黃葉宗傳はる。京都大火。友禪業起る。茶道裏千家起る。漢學者輩出 僧木庵・北村季吟	東大谷・西大谷を分つ 大阪陣起る。二條城行幸。京焼始まる	西陣始まる 天主教傳來。織田信長上京。二條新御所成る。叡山燒討。足利氏亡ぶ。大阪石山合戦。本能寺の變。山崎合戦。叡山再興。聚樂第成る。東山大佛殿建立。北野大茶湯。南禪寺創立	蓮如(僧) 土佐光信・狩野元信(畫家)・武野紹鷗(茶人) 信樂燒・樂燒など始まる	應仁の大亂。銀閣寺成る 赤松滿祐の叛。四條大橋起る。京都に七關を設く	明德の役・應永の亂 足利義滿・同義持・同義量・同義教・明兆(畫家) 京都朝廷に復す。北山殿行幸。金閣成る	懷良親王・北畠親房・楠木正行・足利尊氏・同義詮・赤松則村・高師直 吉野朝廷時代。五山十刹定まる。室町花の御所成る。 夢窓國師・妙葩	護良親王・日野資朝・日野俊基・新田義貞・楠木正成・名和長年 正中の亂・元弘の亂

389
172

昭和十四年四月二十日印刷
昭和十四年四月二十五日發行

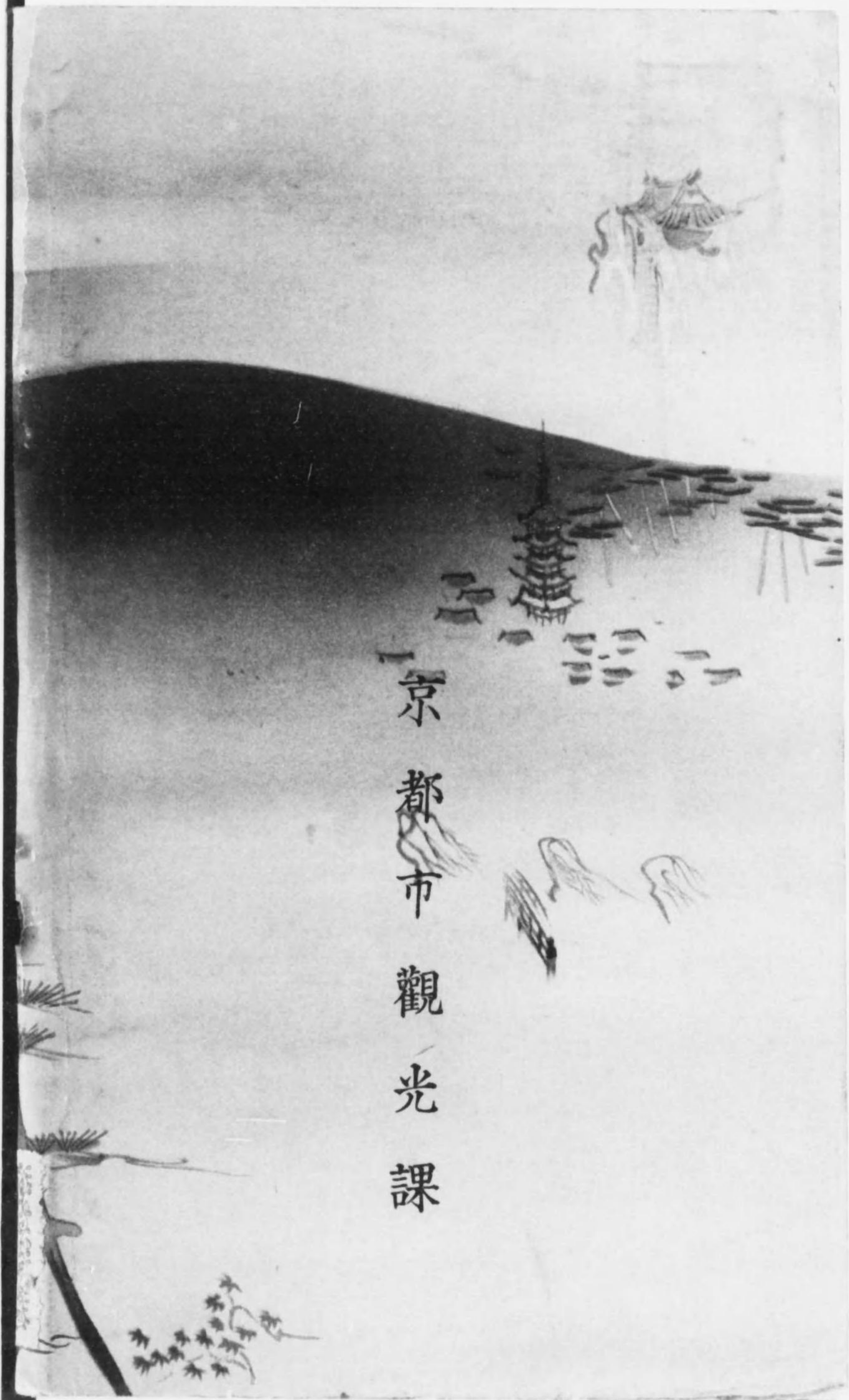
編輯者兼 京都市産業部觀光課

右代表者 大 倉 重 藤

印刷者 眞 野 直 實

印刷所 大阪市西淀川區大仁西二丁目二
凸版印刷株式會社大阪工場

終



京都市観光課